

兵庫県文化財調査報告書第8冊

兼田遺跡調査報告書

—兵庫県姫路市兼田—

1973.3

兵庫県教育委員会

本文目次

序 文

例 言

はじめに	1
1. 遺跡の立地と環境	2
2. 調査の経過	4
(1) 奥山地区坪掘り調査	4
(2) 継地区坪掘り調査	4
(3) 兼田地区坪掘り調査	4
(4) 兼田遺跡調査日記	23
3. 遺 構	27
(1) 兼田A地区の溝状遺構	27
(2) 兼田B地区の溝状遺構	28
(3) 兼田B地区の土墳墓	35
(4) 兼田B地区の土壇	38
(5) 兼田B地区のその他の遺構	38
4. 遺 物	39
(1) 兼田A地区の遺物	39
(2) 兼田B地区の遺物	40
ま と め	84

挿 図 目 次

第1図	兼田地区周辺遺跡分布地図	3
第2図	奥山地区坪掘り設定図	6
第3図	奥山地区坪掘り断面図	7
第4図	奥山地区坪掘り調査断面	8
第5図	奥山地区坪掘り調査断面	9
第6図	継地区坪掘り設定図	10
第7図	継地区坪掘り断面図	11
第8図	継地区坪掘り調査断面	12
第9図	継地区坪掘り調査断面	13
第10図	兼田地区坪掘り断面図	14
第11図	兼田地区坪掘り断面図	15
第12図	兼田地区坪掘り設定図	17
第13図	兼田地区坪掘り調査全景	19
第14図	兼田地区坪掘り断面	20
第15図	兼田地区坪掘り断面	21
第16図	兼田地区坪掘り断面	22
第17図	兼田A、B地区図	25
第18図	兼田A地区遺跡平面図	27
第19図	兼田B地区遺跡平面図	29
第20図	兼田A地区2のE区断面図及び4のF区断面図	31
第21図	兼田B地区溝-2断面図	32
第22図	兼田A、B地区溝断面図	33
第23図	兼田B地区溝-2、3断面図	34
第24図	兼田B地区2のF Pit 内出土遺物	44
第25図	第1土墳墓出土状況	35
第26図	第1土墳墓平面及び断面図	36
第27図	第1土墳墓出土土器	37
第28図	兼田B地区第1土墳墓出土遺物	37
第29図	兼田A、B地区出土土器	46
第30図	兼田B地区出土土鍬、滑石製勾玉	44
第31図	兼田A地区溝内出土遺物	47
第32図	兼田A地区溝内出土遺物	48
第33図	兼田B地区溝-1出土遺物	49

第34回	兼田B地区溝-1出土遺物	50
第35回	兼田B地区溝内出土遺物	51
第36回	兼田B地区溝-2出土遺物	52
第37回	兼田B地区2G区出土遺物	52
第38回	兼田B地区出土遺物	53
第39回	兼田B地区出土遺物	54
第40回	兼田B地区出土須恵器	55

図 版 目 次

図版 1	兼田 A 地区東、西よりの遺影	57
図版 2	兼田 A 地区区画設定、溝調査中、調査終了後	58
図版 3	兼田 A 地区調査後及び溝断面	59
図版 4	兼田 A 地区溝内出土遺物	60
図版 5	兼田 A 地区出土遺物	61
図版 6	兼田 B 地区南、東よりの遺影	62
図版 7	兼田 B 地区調査中及び調査後	63
図版 8	兼田 B 地区調査後	64
図版 9	兼田 B 地区溝-1	65
図版 10	兼田 B 地区 2 の F 土壇及び 2 の F、G 土壇及びピット	66
図版 11	兼田 B 地区 2 の F 区ピット及び 5 の E 区須恵器出土状況	67
図版 12	兼田 B 地区 3 の C 区溝及び 4 の B 区溝	68
図版 13	兼田 B 地区溝内出土状況	69
図版 14	兼田 B 地区 3 の C 区溝断面及び 2 の E 区溝断面	70
図版 15	兼田 B 地区 4 の C、D 区溝及び 3 の E 区溝断面	71
図版 16	兼田 B 地区 4 の F 区及び 2 の E 区溝断面	72
図版 17	兼田 B 地区 3 の D 遺構	73
図版 18	兼田 A 地区、B 地区出土遺物	74
図版 19	兼田 B 地区出土遺物	75
図版 20	兼田 B 地区出土遺物	76
図版 21	兼田 B 地区出土遺物	77
図版 22	兼田 B 地区出土遺物	78
図版 23	兼田 A、B 地区出土遺物	79
図版 24	兼田 B 地区出土遺物	80
図版 25	兼田 A 地区出土遺物	81
図版 26	兼田 A、B 地区出土石器、土錘、滑石製勾玉	82
図版 27	兼田 B 地区出土瓦	83

序 文

国道2号線を緩和するため、近畿地方建設局姫路工事事務所に依って、姫路バイパス建設工事が計画されましたが、この計画路線中に兼田遺跡が発見されましたので、昭和46年度に兵庫県教育委員会が近畿地方建設局の委託に依り発掘調査を実施したものであります。

この調査報告書は、発掘調査の結果を一括集録したものです。この資料を今後の研究に少しでも利用して頂ければ幸いです。

この調査の実施にあたり、深いご理解とご協力を頂いた近畿地方建設局姫路工事事務所の方々に対し、心から厚くお礼のことはを申し上げます。

昭和48年3月

兵庫県教育長

白 井 康 夫

例 言

1. 本書は、昭和46年6月～11月の間に実施した姫路市兼田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 兼田遺跡の調査は、近畿地方建設局の委託をうけ、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本書の遺構断面図に示した数字は標高である。
4. 本書の遺物実測図と土器の写真番号は一致する。
5. 本書の遺構、遺物の整図は吉田昇、秋枝芳、黒田京子、大村敬通が、遺物の実測は吉田昇、岡崎正雄が担当した。
整理作業は黒田京子、山野恵子、近畿大学の丹治康明、深井明比古、樋口浩一、高島信之、
竜谷大学の宮崎素一の諸氏に協力を得た。
6. 遺跡及び遺物の写真は大村が担当した。
7. 本文は、土拉墓が村上、石器は吉田、他については大村が執筆した。

はじめに

兵庫県教育委員会は、昭和46年5月に、近畿地方建設局姫路工事事務所の依頼により、姫路バイパス建設工事の予定地、姫路市兼田から同明田までの間を地元研究者、今里幾次、松本正信、加藤史郎の3氏の協力を得て分布調査を行った。その結果、兼田、奥山、継の3地区で遺物が表面採集された。

この遺物の散布状況から、姫路バイパス工事に先立ち、予察調査を実施する事が必要であると思われたので、兵庫県教育委員会が近畿地方建設局姫路工事事務所より委託を受け、調査を実施した。

なお、予察調査の結果に基づき、兼田地区については、発掘調査を昭和46年7月より11月の間に実施した。

調査関係者は次のとおりである。

予 察 調 査		発 掘 調 査	
調 査 員	安 達 新(嘱託)	調 査 員	村 上 絃 揚(県文化課技師)
	小 川 良 太(嘱託)		櫃 本 誠 一(県文化課技師)
			大 村 敬 通(県文化課技師)
		調 査 参 加 者	吉 田 昇(県文化課技術職員)
調査協力者	建設省姫路工事事務所		
	建設省姫路バイパス工事事務所		
	青木組姫路バイパス工事事務所		
	地元部落一同		

1. 遺跡の立地と環境

兼田遺跡は、兵庫県姫路市糸引町兼田に位置する。

この兼田遺跡の所在する糸引町兼田地域は、市川の東岸にあたり、兼田大塚古墳のすぐ北側の小支谷の入口部に位置する。兼田遺跡の位置する地域は、市川の氾濫によって形成された沖積平野の極く一部であり、市川下流域の東岸部には兼田遺跡と同様の弥生時代にあたる遺跡が存在する。そして、丘陵裾部まで入り込んだ小支谷の奥部にあり、また小支谷の入口部にも位置する事が、現在までの分布調査から明らかにされている。

遺跡を列記すると次の6遺跡をあげる事が出来る。

1. 飾磨高校校庭遺跡 2. 兼田山中復遺跡 3. 兼田横田遺跡 4. 糸引町北原遺跡 5. 兼田箱谷遺跡 6. 坂元山遺跡

また、市川の東部にあたる八家川の流域の遺跡をあげると次の 1. えびす島遺跡 2. 継遺跡である。

以上市川と八家川に挟まれた平野及び谷部に、計8カ所の弥生時代の遺跡がある。これらの遺跡が基盤となって、古墳時代に入ると兼田大塚古墳及び坂元町宮山古墳(注1)が形成された後、この2古墳の周辺の丘陵上に古墳群が築造されていったのである。

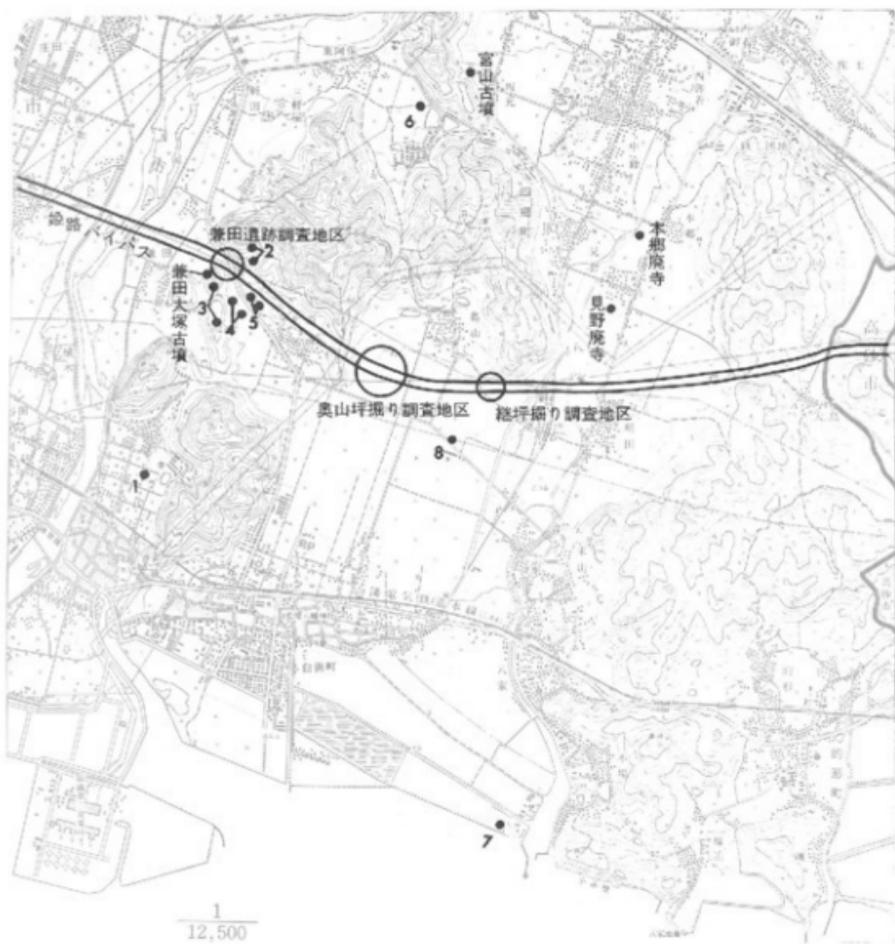
それ以後も、四郷町本郷の本郷廃寺、四郷町見野の見野廃寺の建立に大きな力となっていった。

(注1) 姫路市文化財調査報告1、4

市川下流における弥生時代遺跡表

番号	遺跡名	所在地	出土遺物
1	飾磨高校校庭	飾磨区妻鹿	弥生式土器
2	兼田山中復	糸引町兼田	弥生式土器・石鏃
3	兼田横田	糸引町兼田小字横田	石鏃(サメカイト)石屑
4	北原	糸引町北原	弥生式土器
5	箱谷	糸引町兼田箱谷	〃
6	坂元山南麓	四郷町東阿保坂元山南麓	〃
7	えびす島	白浜町八木港えびす島	〃
8	継	糸引町継	〃

この遺跡地名表は、兵庫県遺跡分布地図第2集によって作製した。



第1図 兼田地区周辺遺跡分布地図

2. 調査の経過

(1) 奥山地区坪掘り調査 (第2図～5図)

近畿地方建設局姫路工事事務所センター番号420より427までの間の調査を行った。

調査は、昭和46年6月23、24日の2日間で実施された。調査の方法は、2m×2mの坪で11カ所設定して実施した。

調査の結果、この地域一帯は、耕土上面に約50cmから80cmの巾で、すでに客土として盛土されていた。この盛土の中に、分布調査の際、採集した須恵器、土師器が含まれておりその下層、耕土より地山までの土層中には、全然遺物が含まれていなかった。

この状態が、第1Gより第11Gまですべてが、同様の状況であった。

以上の状況から考察すると、分布調査の際、採集した遺物は、すべて、二次的な土層に含まれていて、この奥山地区本来の土層状況とは違い、姫路バイパス建設工事の為、調査以前にこの地域に、盛土されたものであった。

以上の結果から、この奥山地区には、遺跡の存在する事はないものと思われるので、発掘調査の必要はないと考えた。

(2) 継地区坪掘り調査 (第6図～9図)

近畿地方建設局姫路工事事務所センター番号383より390までの間の調査を行った。

調査は、昭和46年6月25、26日の2日間で実施された。

調査の方法は、2m×2mの坪を6カ所設定して実施した。

調査の結果は、この地域も奥山地区と同様に、耕土上面に盛土されていた。分布調査の際、この地域で採集した須恵器、土師器は、この地区本来のものではなく、他の地域から道路建設の為に、盛土された土層中に含まれていたものである。

第1Gより第6Gまですべて同様であった。

調査の結果、この継地区は、奥山地区と同様に遺跡が存在することは、考えられない。

(3) 兼田地区坪掘り調査 (第10図～16図)

兼田地区における第1次確認調査は、近畿地方建設局姫路工事事務所設定のセンター番号473～487までの間を対象に、調査を行った。

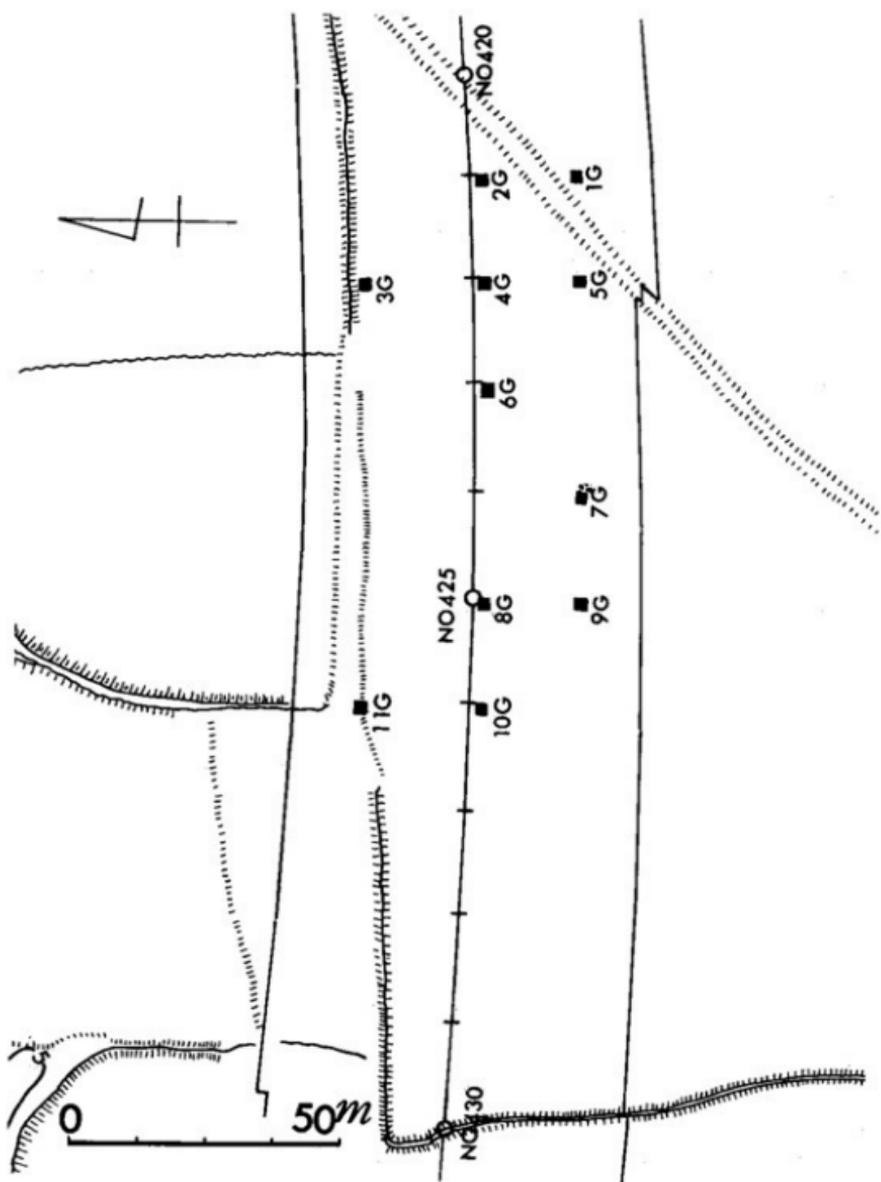
調査の方法は、昭和46年5月に現地立会いを行った際、土器を採集した地点を中心に、2m×2mの坪を、合計14カ所設定した。

この調査結果によれば、第1Gより第4Gまでの間は、市川の氾濫によって形成された地形であり、この間にも、第4Gにおいては耕土下約1mの砂層中に土師器が包含していたが、これは遺構にとまなうものではなかった。

第5・6G地区については、耕土下に包含層が存在していた。この第5・6Gから出土した土器は、古墳時代から奈良時代にいたる須恵器及び土師器であった。

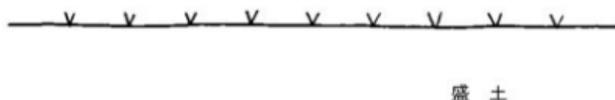
第7・8・9・11~14Gについては、耕土より地山までに遺物が全然含まれることなく又、遺構の存在する可能性は、全くないと思われる。

第10Gについては、耕土下で弥生式土器、土師器、須恵器が薄黒色土中に含まれていた。上記の調査結果により、第5・6・10Gについては発掘調査をするために、掘り下げを中止して本調査を実施した。

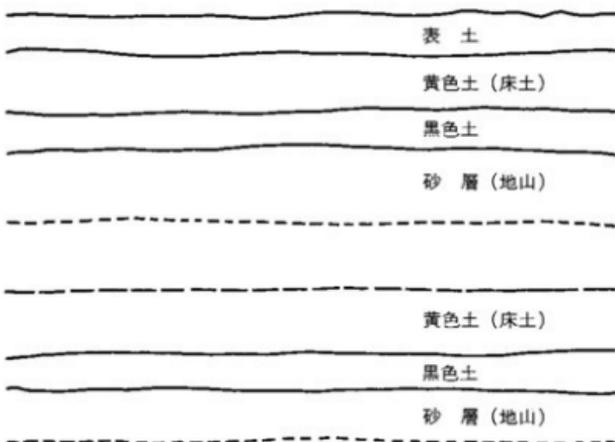


第2図 奥山地区坪掘り設定図

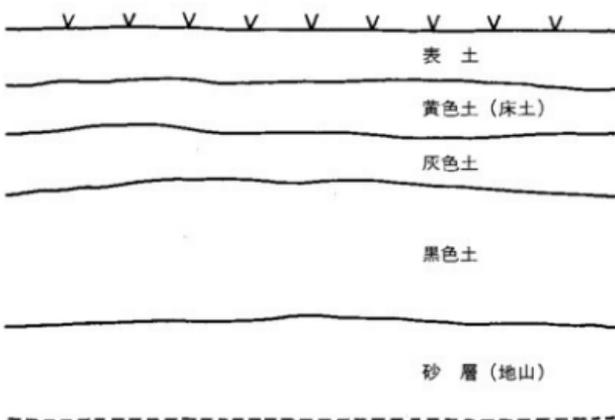
1G



3G



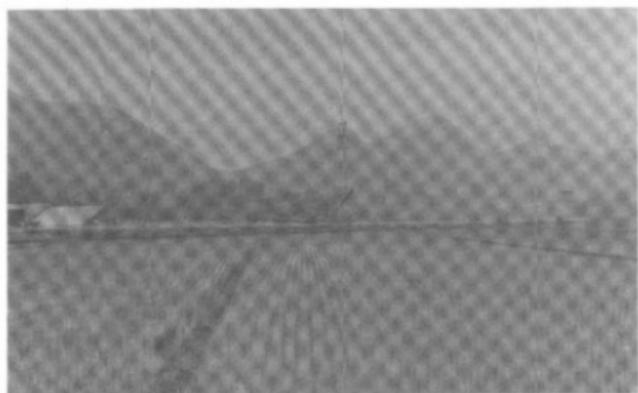
5G



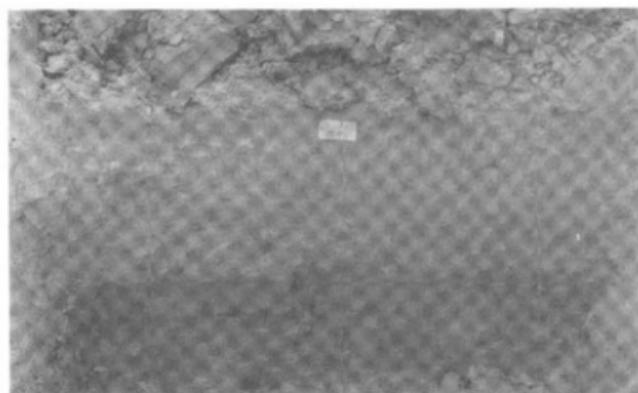
0 1m

第3图 奥山地区坪掘り断面图

全 景
(南より)



1 G

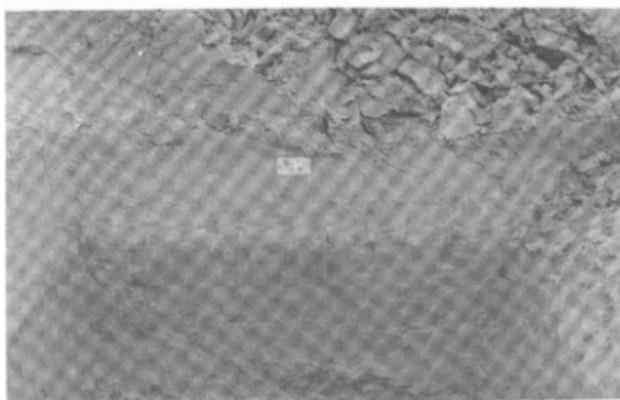


2 G

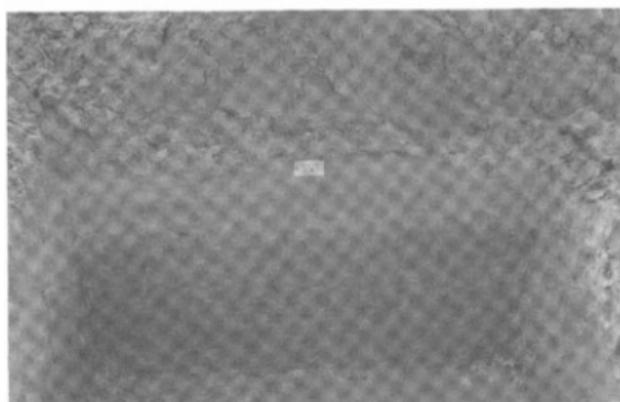


第4図 奥山地区坪掘り調査断面

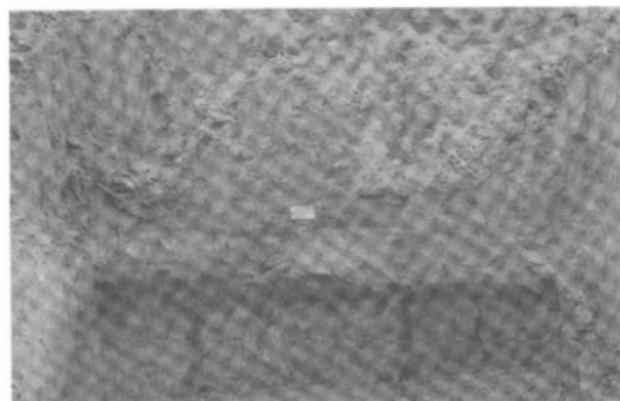
3 G



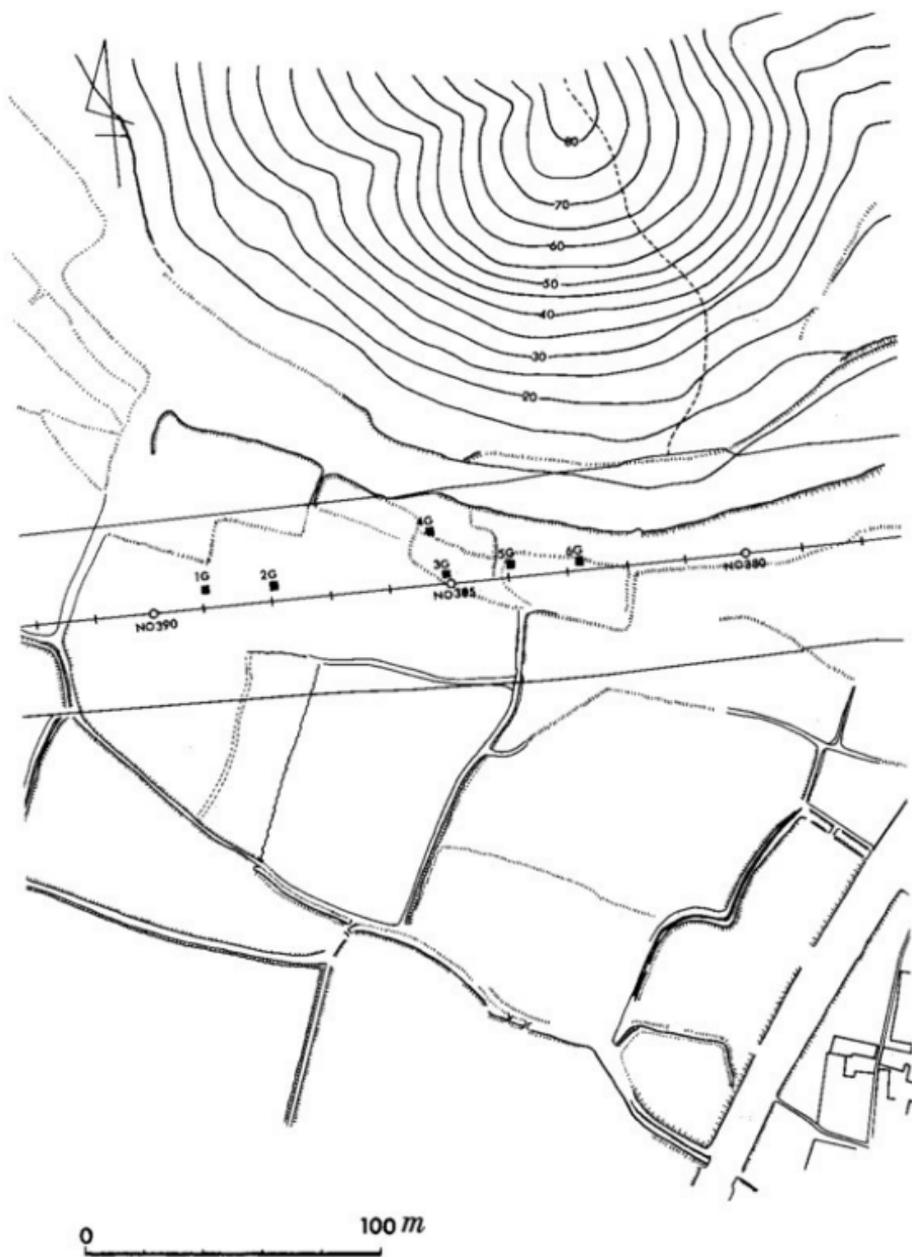
6 G



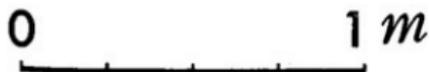
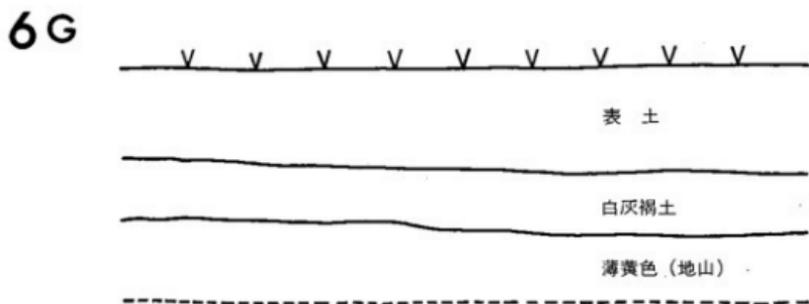
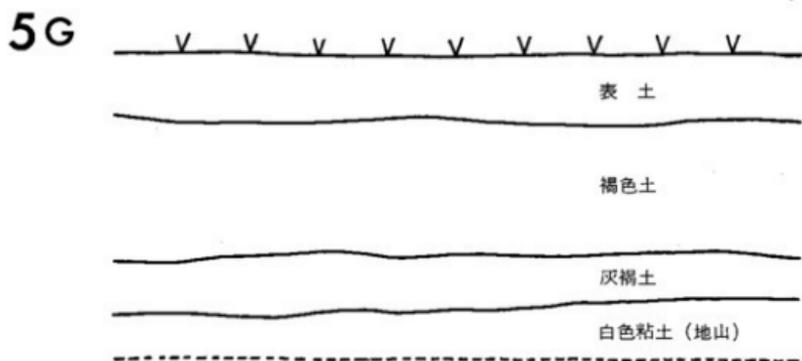
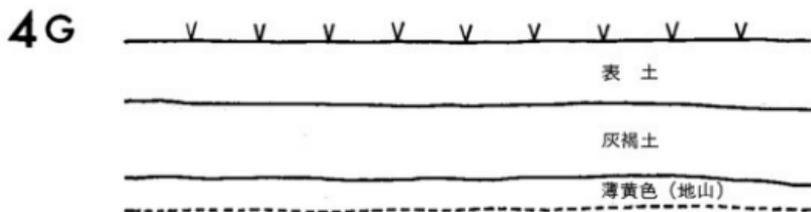
9 G



第5図 奥山地区坪掘り調査断面

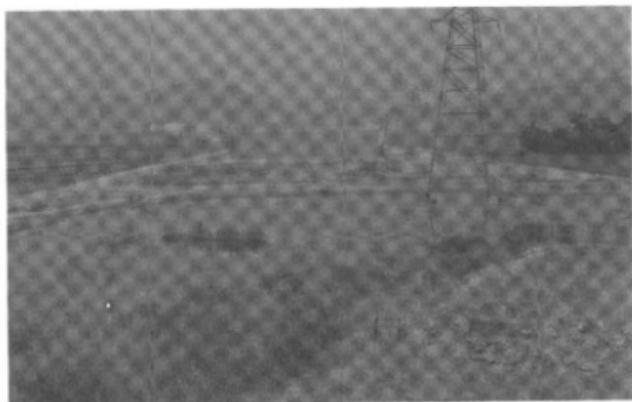


第6図 継地区坪掘り設定図



第 7 图 繼地区坪掘り断面図

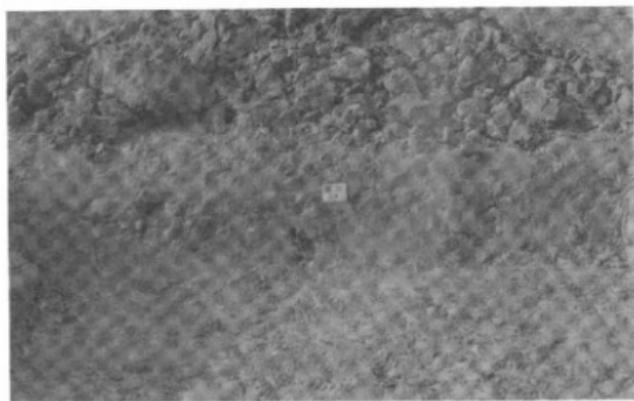
全 景
(西より)



1 G

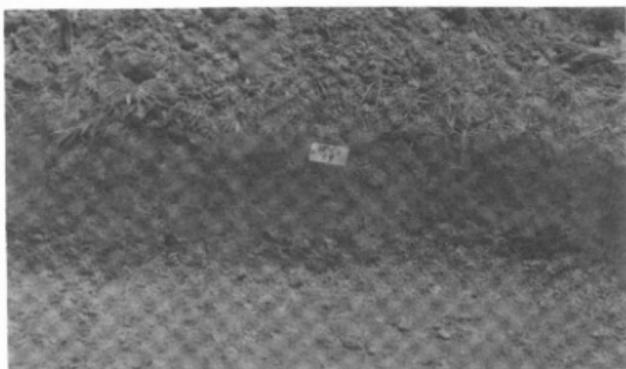


3 G

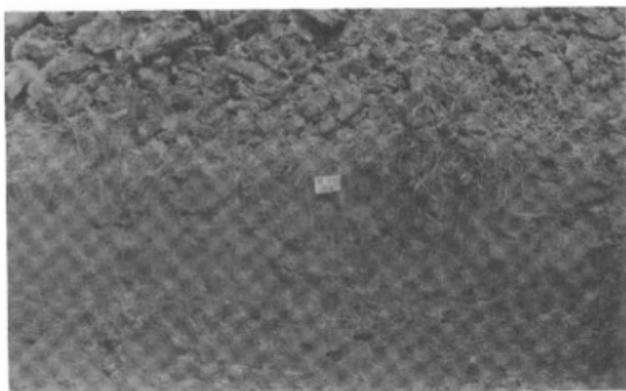


第 8 図 礫地区坪掘り調査断面

4 G



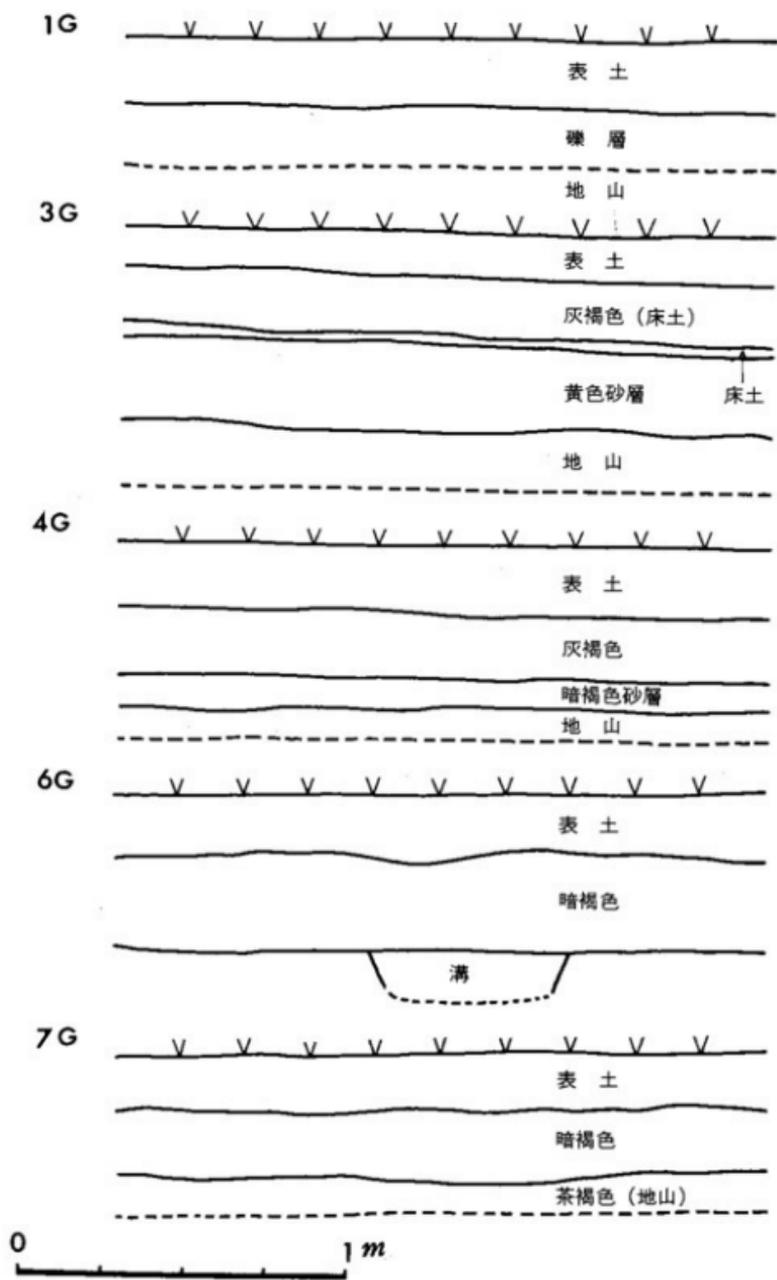
5 G



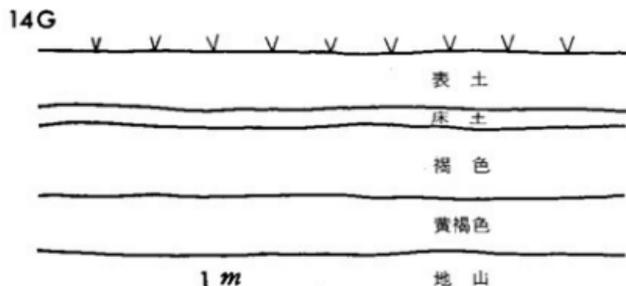
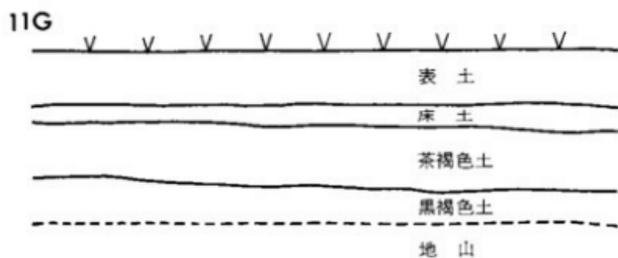
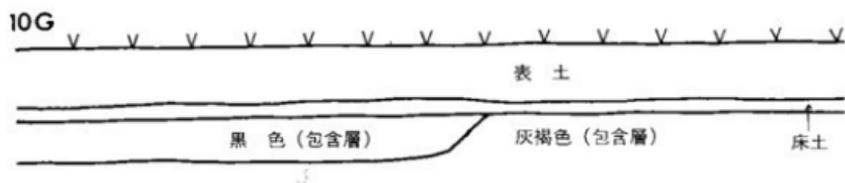
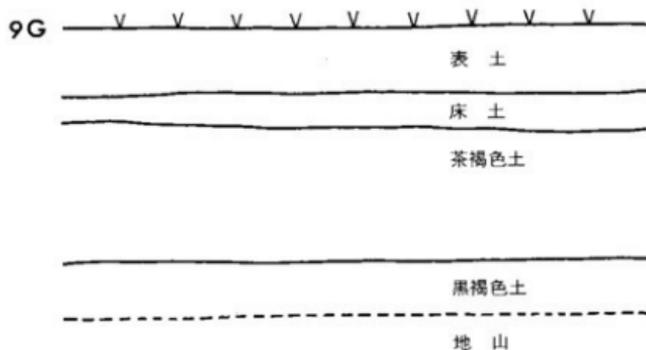
6 G



第9図 糞地区坪掘り調査断面



第10図 兼田地区坪掘り断面図



第11圖 兼田地区坪掘り断面図



第12図 兼田地区坪掘り設定図

全 景
(西より)



全 景
(東より)

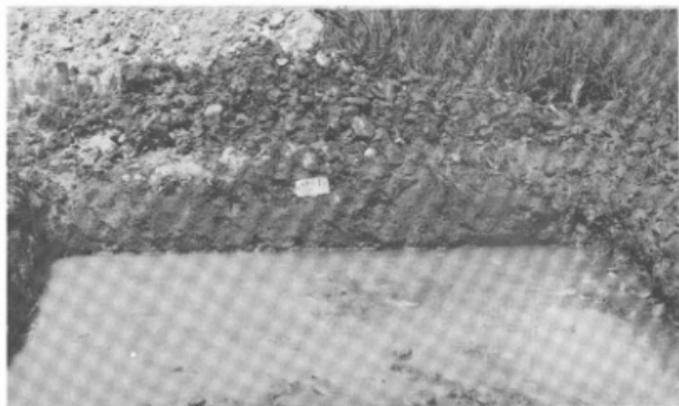


全 景
(西より)

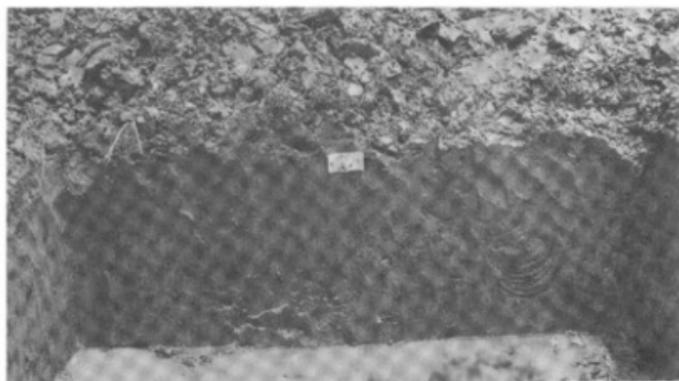


第13図 兼田地区坪掘り調査全景

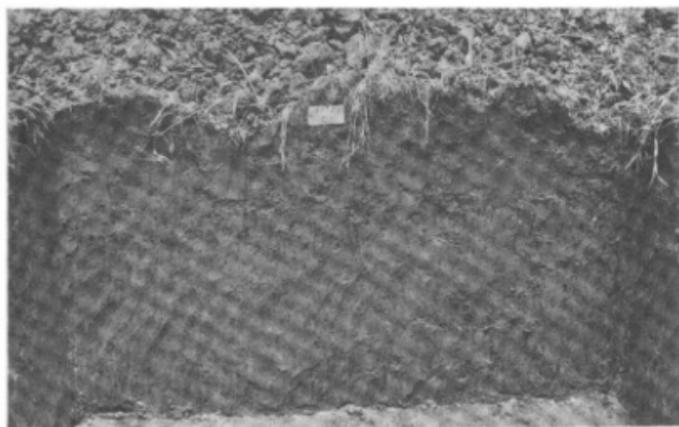
1 G



3 G

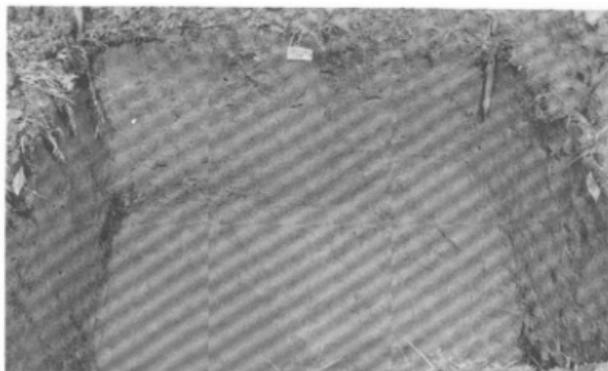


4 G



第14図 兼田地区坪掘り断面

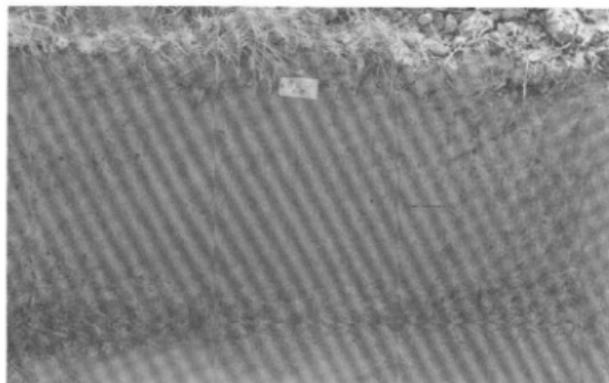
6 G



7 G

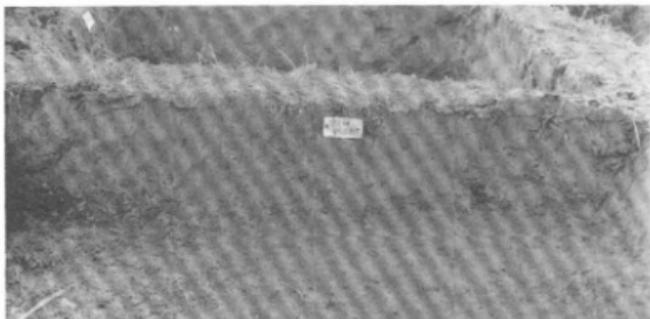


9 G



第15図 兼田地区坪堀り断面

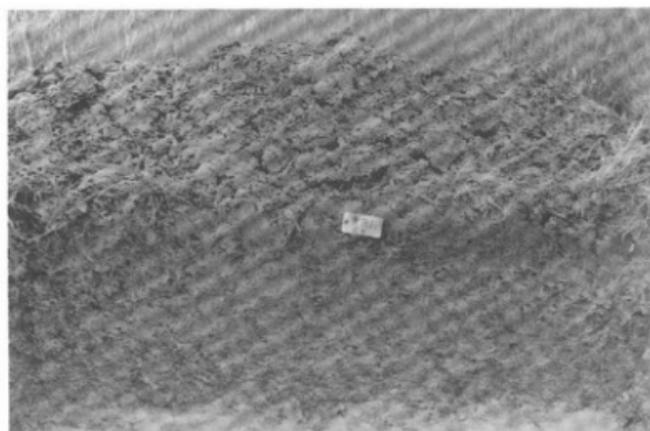
10 G



12 G



14 G



第16図 兼田地区坪掘り断面

(4) 兼田遺跡調査日誌 (第17回)

昭和46年9月27日。本日より兼田遺跡の調査を開始する。なお、坪掘り調査の結果から姫路白浜線をはさんで東を兼田A地区とし、西をB地区とする。

9月28日～29日、A地区、B地区の区画設定を行なう。

9月29日～30日、A地区の表土削ぎを開始、B地区は、下草刈りを行なう。

10月1日、A地区B-4、C-2、E-3の表土削ぎを終了する。なお、午前10時半、雨のため作業中止。

10月2日～4日、県に帰庁する為、調査は休みである。

10月5日、雨の為午前中にて作業中止する。

10月6日～9日、B地区の耕土削ぎをする。

10月11日～16日、B地区のB-4～B-6、C-4、C-6、E-5の耕土削ぎを終了したので、さらに地山と思われる面まで約60cm掘り下げる。その結果、C-4において、巾約40cmの地山を掘り込んだ溝を検出する。又、B-4内についても巾約50cmの溝を検出する。午後、姫路市賢明女子学院高等学校より見学に来る。

10月18日、先夜来の雨の為、遺跡全体に水が溜っていた為、本日は排水作業を行なう。

10月19日～23日、C-3、E-2、D-3、F-2、C-4、C-5内に地山を掘り込んだ溝を検出する。なお、B-4より南側については、北より地山面が、下がっている事が判明した。E-3の西端部に巾約50cmの円形を呈した土壇墓と思われる遺構を検出した。

10月25日～30日、A-3、B-2の北東に黒色土層があり、他の区域とは様子が違い、弥生式土器のみが出土された。この事から、この地域に弥生時代の溝があると思われる。又、G-2も弥生式土器が地山面から出土された。A-4、B-4、C-3、D-3、E-3、F-2より検出されていた溝を掘り下げる。この溝は、東西に走っているものである。C-2の溝内に須恵器のカメ腹2片が包含していた。C-3において、東西と南北の溝が交差している事も判明する。10月30日は雨の為、現場作業を中止して、土器洗いを作業員と共に実施する。

11月1日～2日、B地区のC-4、C-5、D-5の溝を掘り下げる。なお、10月29日より村上技師が県庁へ引きあげる為、榎本技師と交代する。11月1日からA地区の調査を開始する。なお、榎本技師が担当する。

11月3日、文化の日、調査休み。

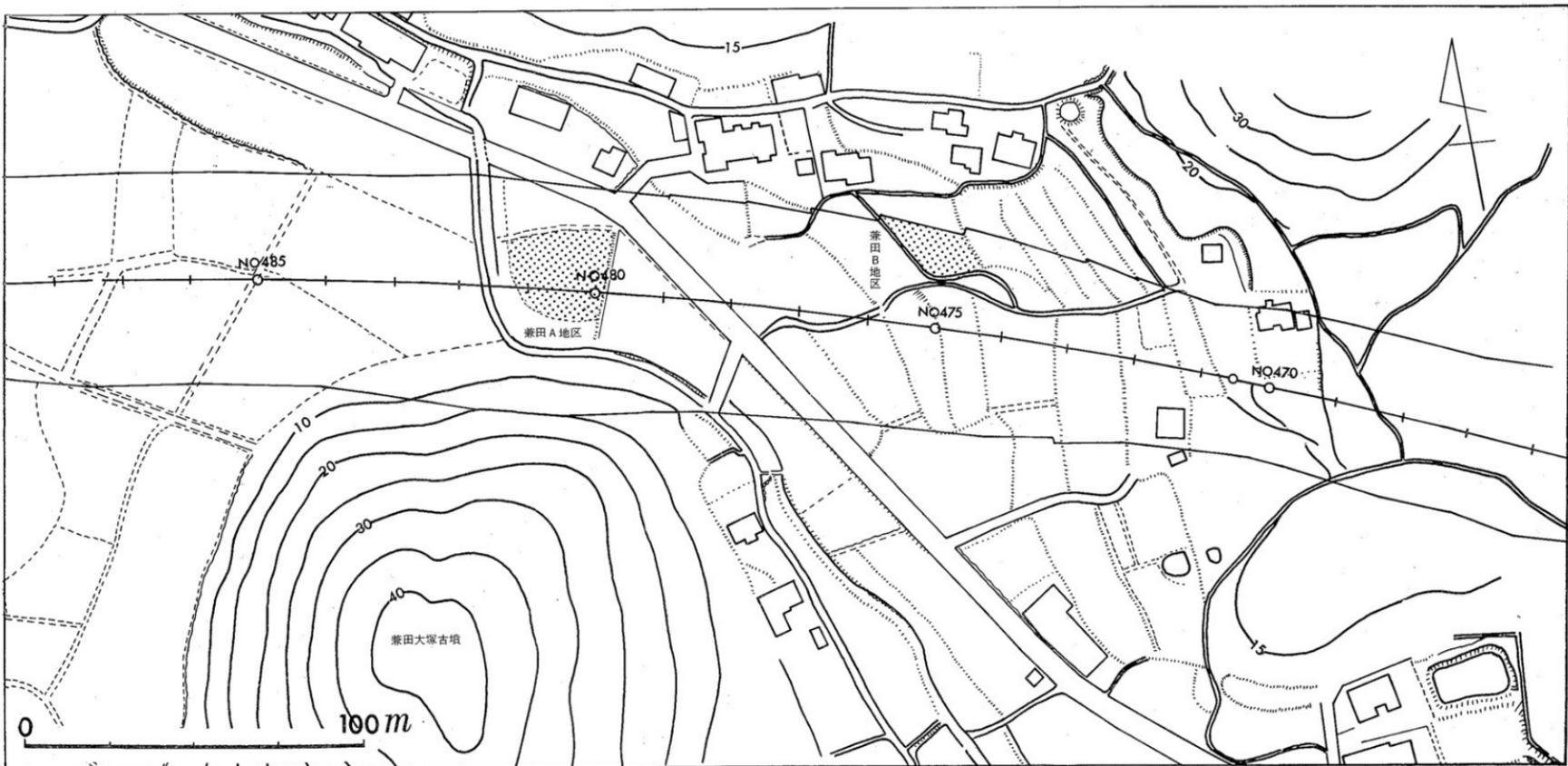
11月4日～6日、E-2よりF-5に向かって走る巾3m、深さ1m50cmのU字型の溝がある為E-3の溝を掘り下げる。E-3の土壇墓の写真撮影。E-4にもE-3の同様な土壇墓と思われる遺構を検出する。E-3の溝を掘り下げた結果、下層においては、弥生式土器のみが包含されていた。その、上層に含んでいる遺物は、弥生時代のものがなく、土師器のみである。なお、A地区において、黒色土層中に弥生式土器が出土された。その時期は、第3様式から第4様式にあたる。

11月8日～13日、E-2の溝の掘り下げ。この溝内においても、E-3と同様の状態である事が判明した。D-3、E-2、E-3、F-2の断面の実測および写真撮影を行なう。その後、土手の取りはずし作業を行なう。D-2の溝の土器の包含状態は、E-3と同様である。F-2、C-5、D-4、D-5の断面の実測および写真撮影を行なう。その後、この土手を取りはずしにかかるとなる。A地区調査範囲の中央部に、南北に走る溝が確認された。この溝内に包含する遺物は、部分的に弥生式土器は包含しているが、その上層部からは須恵器又、その下層中からも須恵器が出土する。この事は、奈良から平安時代にかけて埋められている事が判明した。溝の造られた時期は弥生時代である。

11月15日～16日、台風接近の為、高圧線の鉄塔が危険であるとの関西電力の強い要望で脚部にコンクリート枠を作り、補強する事に同意する。しかし、この為、B地区の溝遺構が部分的に破壊された。

11月17日～20日、A地区の溝を全体に渡って検出する。その後、断面の実測および写真撮影を行なう。B地区、遺構および断面の実測、写真撮影を完了して、B地区の調査を終了した。

11月21日、先日、兼田A地区、B地区の調査を完了したので、本日完了後の遠影写真を撮影する。引き続き調査道具を県庁へ搬送して、全ての仕事を終了する。



第17图 兼田A、B地区图

3. 遺 構

(1) 兼田A地区の溝状遺構(図版2、3、第18図、22図一上、下)

北東から南西に向かって走る長さ18m、幅約5m、深さ40cmのなだらかな溝である。

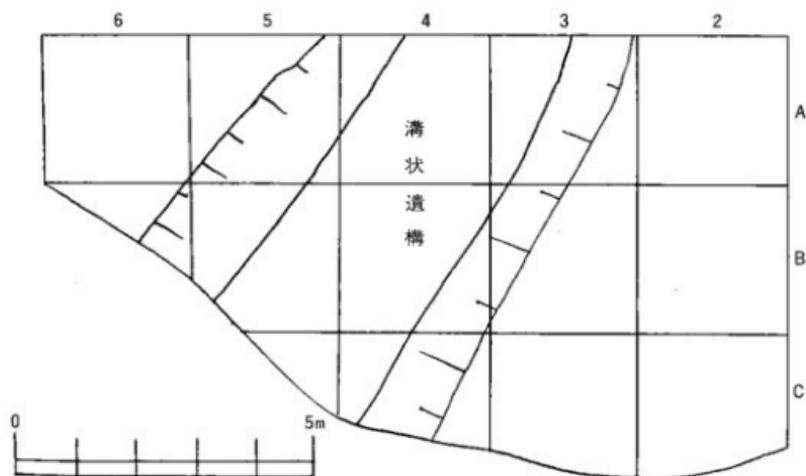
溝内堆積土は、耕土下が灰茶褐色土で、溝底辺に約10cmの薄黒色土が堆積している。この溝の東に、一部黒褐色土の堆積のあることが認められた。

黒褐色土の土層中に弥生式土器の細片が多く含まれていたが、比較的大きい破片も含まれていた。溝底辺に堆積する薄黒色土層中には、古墳時代の土師器及び須恵器が少量、円筒埴輪片約300点が含まれていた。また、耕土下の灰茶褐色土中には、弥生式土器から平安時代にあたる須恵器の底部、糸切り底が包含していた。また、この土層中には、約50cm四方の大きな岩や石等が混入していることもあげられる。

溝は地山を切り込み、北から南に向かってなだらかに走り、耕土下の堆積土、灰茶褐色土も南に下がるに従って厚くなっている。

弥生時代の溝と考えられる遺構面を切って幅の広い古墳時代の溝が築かれたのであろう。

その後、古墳時代に築かれた溝も、平安時代に水田とする為、周囲にあった古墳も破壊され盛土されたものと思われる。



第18図 兼田A地区遺跡平面図

(2) 兼田B地区の溝状遺構(第19~23図)

溝 - 1(第22図、図版15-下、16)

調査範囲内で判明した溝は、北東から南西に走る長さ14m、幅2m~2.9m、深さ80cm~1mのU字形の溝である。

溝内には5層の地積土があり、遺物は第4層の黒色土と第5層の灰青黄色粘質土の2層から出土する。第4層においては、古墳時代の土師器のみが出土し、第5層からは、弥生時代の後期に当たる土器片が比較的多数出土した。

この溝の造られた時期は、出土遺物から考えると弥生後期にあたる。

なお溝は、南に行くに従って幅が狭くなる。溝の北限は、調査範囲外にまでおよんでいたが、追求することは出来なかったが、地形上から考えると、北側の山裾部あたりに連続しているものと思われる。

溝 - 2(図版9、第21図)

東西に走る長さ22m、幅約40cm、深さ20~25cmで幅、深さとも全体に渡って同じ規模の細長い溝である。

溝-2は、溝-1の土面を走り、溝内には全体に灰黒色土が堆積し、一部には黄褐色土も混入している。

遺物は、溝全体を通じて少量の土師器細片が溝底辺から出土した。古墳時代の土師器である。また他に、2F地区で滑石製の石製模造品の勾玉1個が、溝内より出土したことが特筆される。

溝-2も溝-1と同様に西北に向って続くものであるが、調査範囲外のため追求出来なかった。

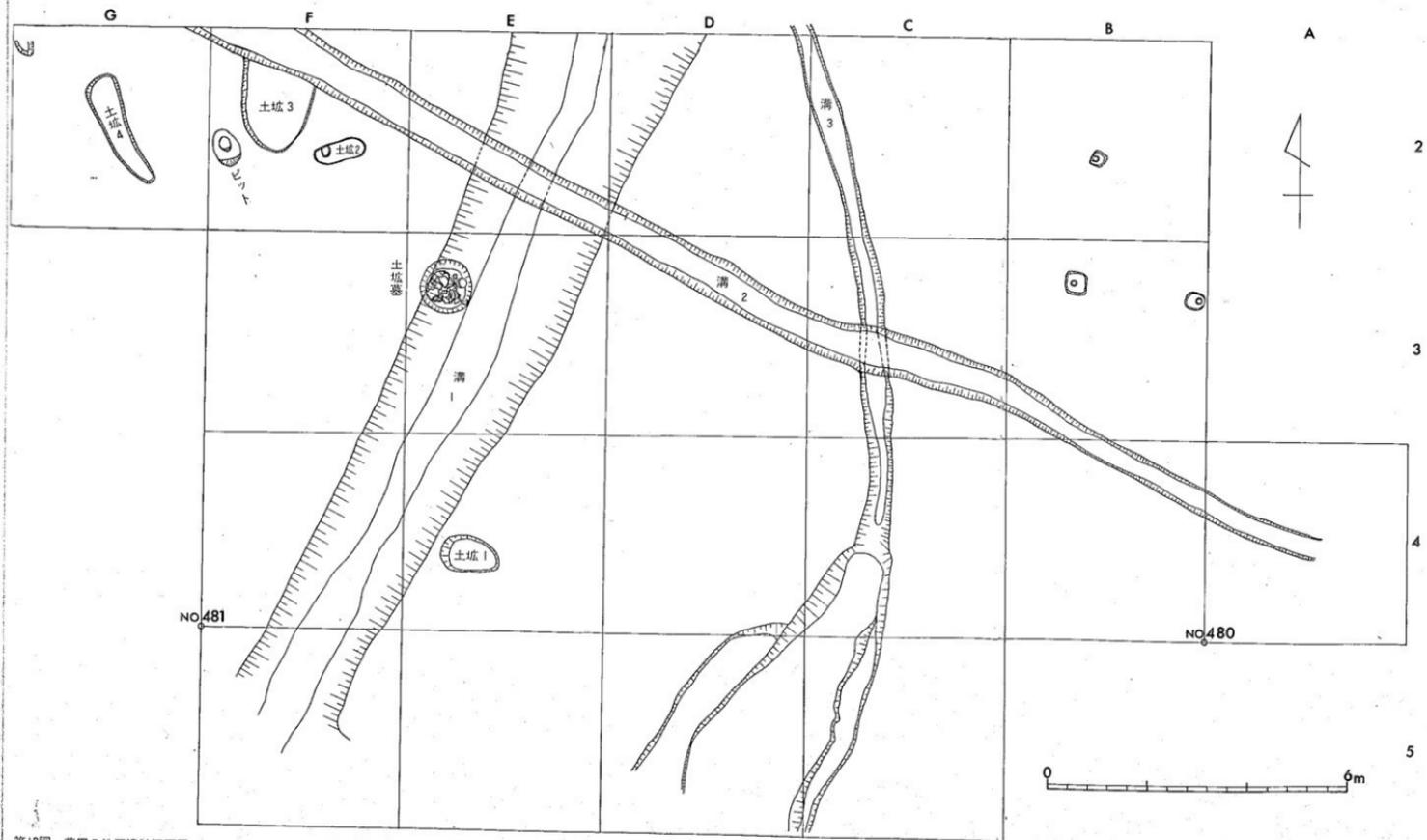
溝 - 3(第23図、図版15-上)

溝-1と同様に北より南に走る長さ16m、深さ約15cm、幅約30cmの溝である。

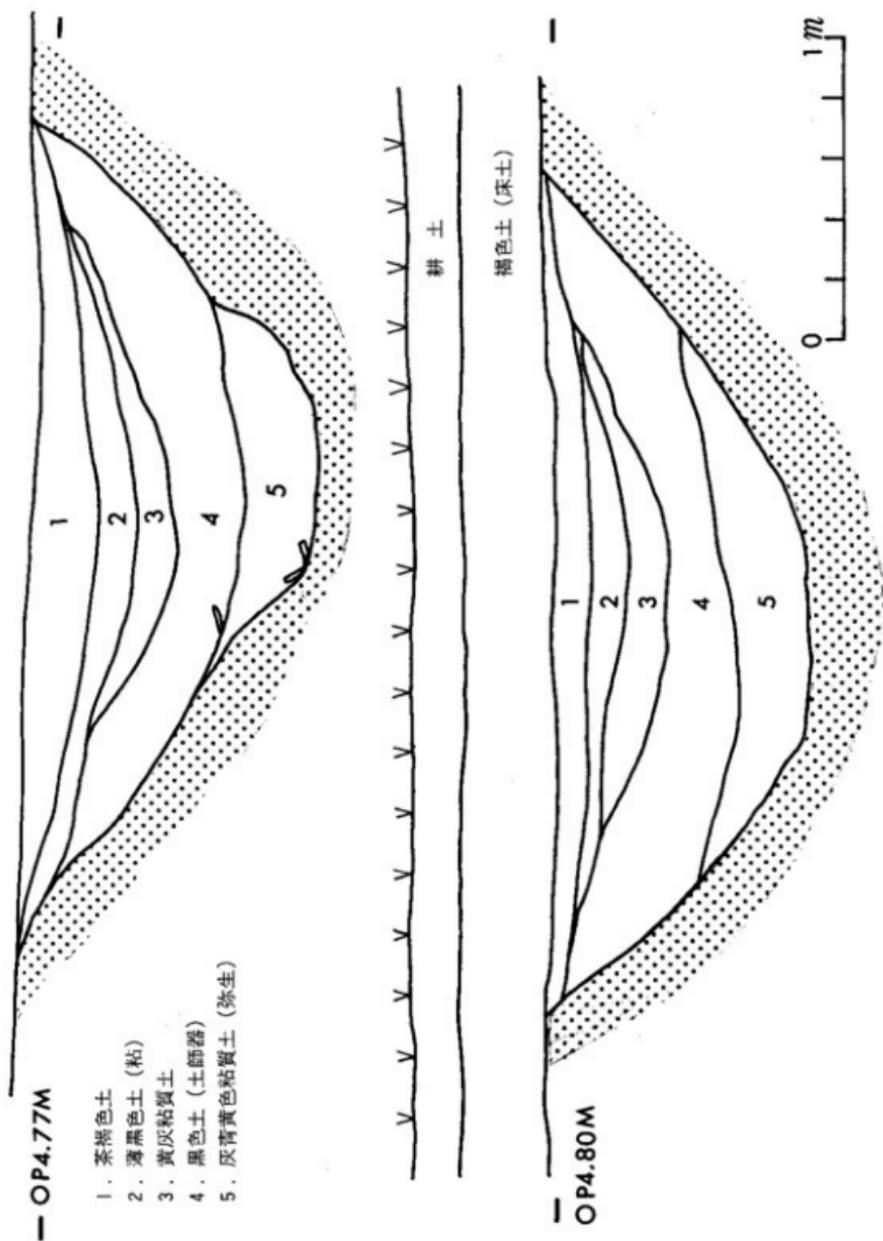
B地区は4ラインから南全体について、奈良時代以後水田によって北側より大きく切り下げられ、再度床土の盛土としてかさあげされている為に、溝-3はこの地域から急に幅が広がっている。

幅広い溝の底部には古墳時代の土師器が含まれ、その上層には奈良時代の須恵器が多数含まれていた。

以上の状況の様に、4ラインより南地域には北側の様に褐色土は殆んど存在していない。床土中には、古墳時代の土師器、須恵器、弥生式土器、平安時代の須恵器が包含していた。



第19図 兼田B地区遺跡平面図



第20图 (上) 濑田A地区2のE区断面图
(下) 濑田A地区4のF区断面图

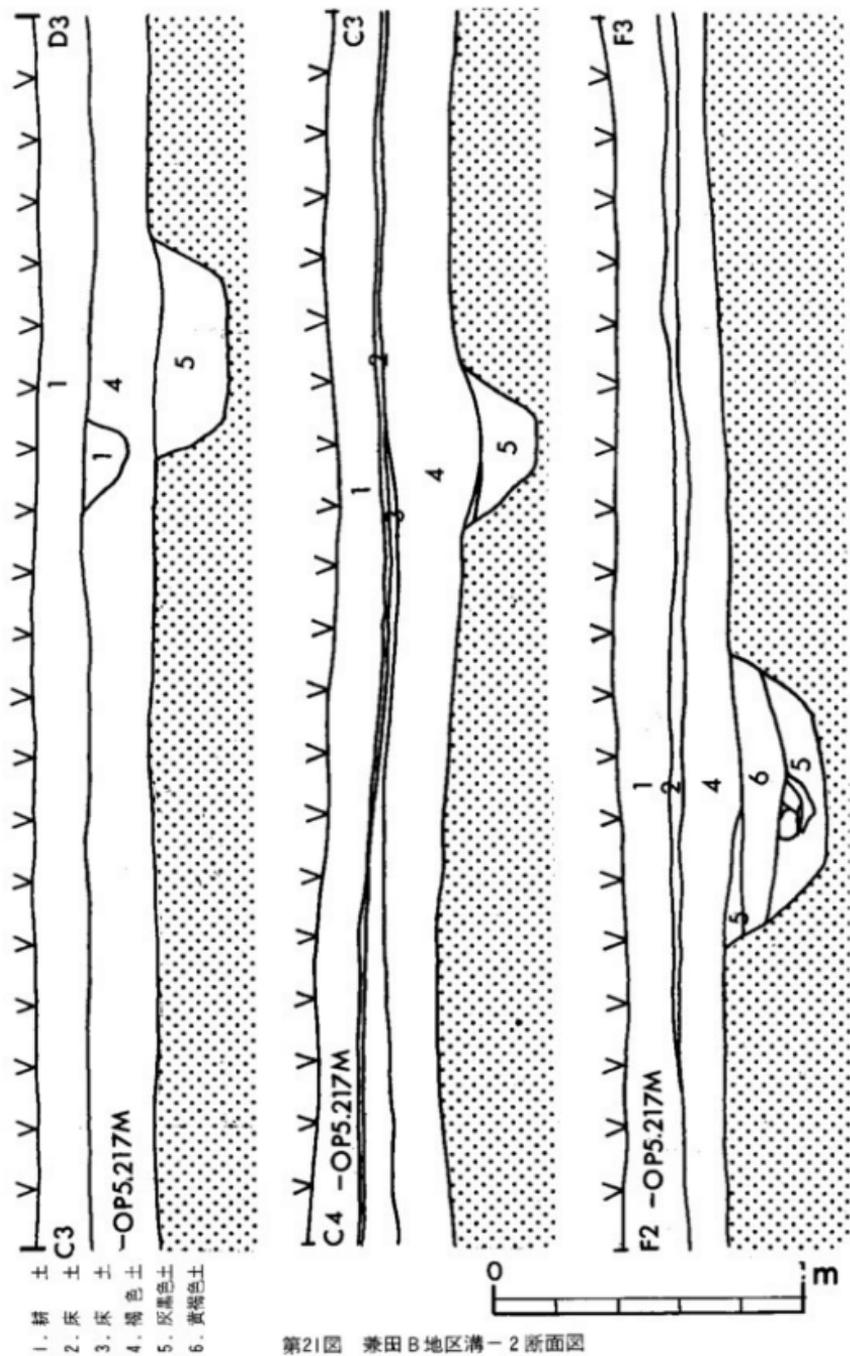
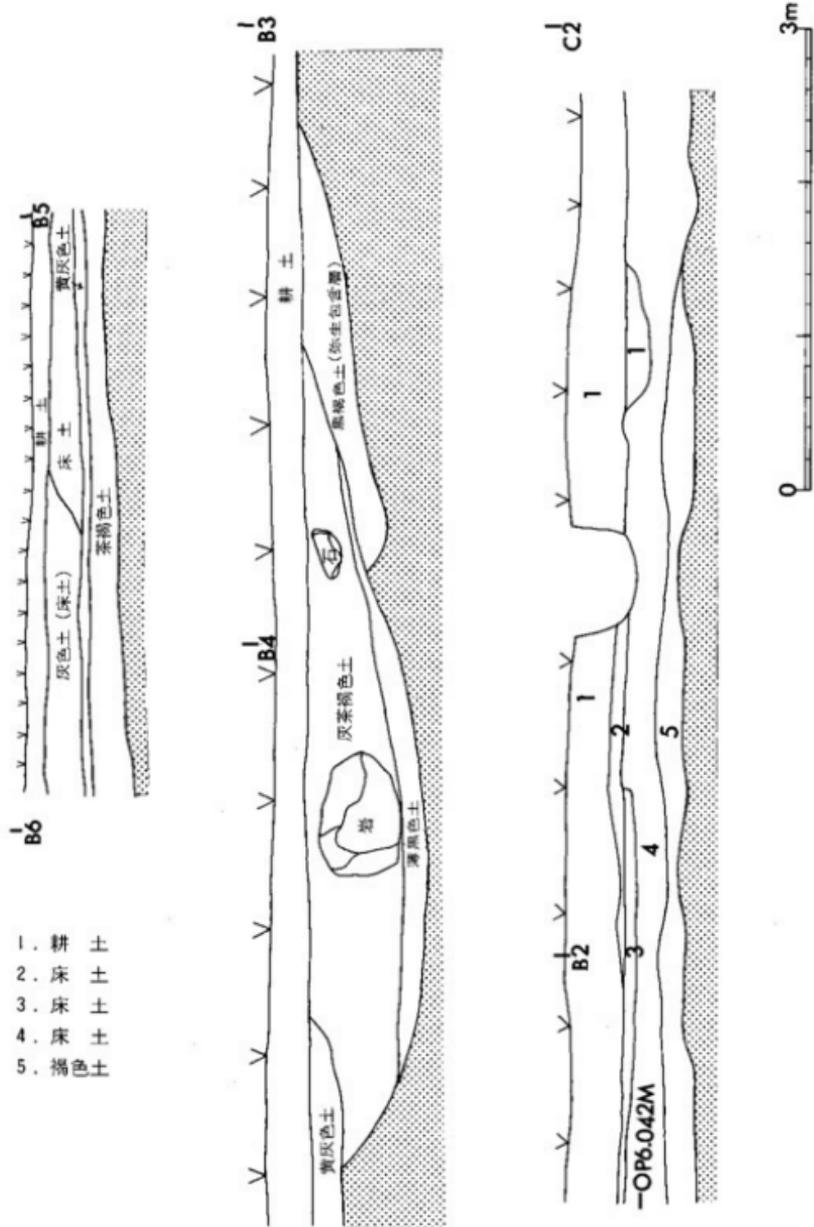
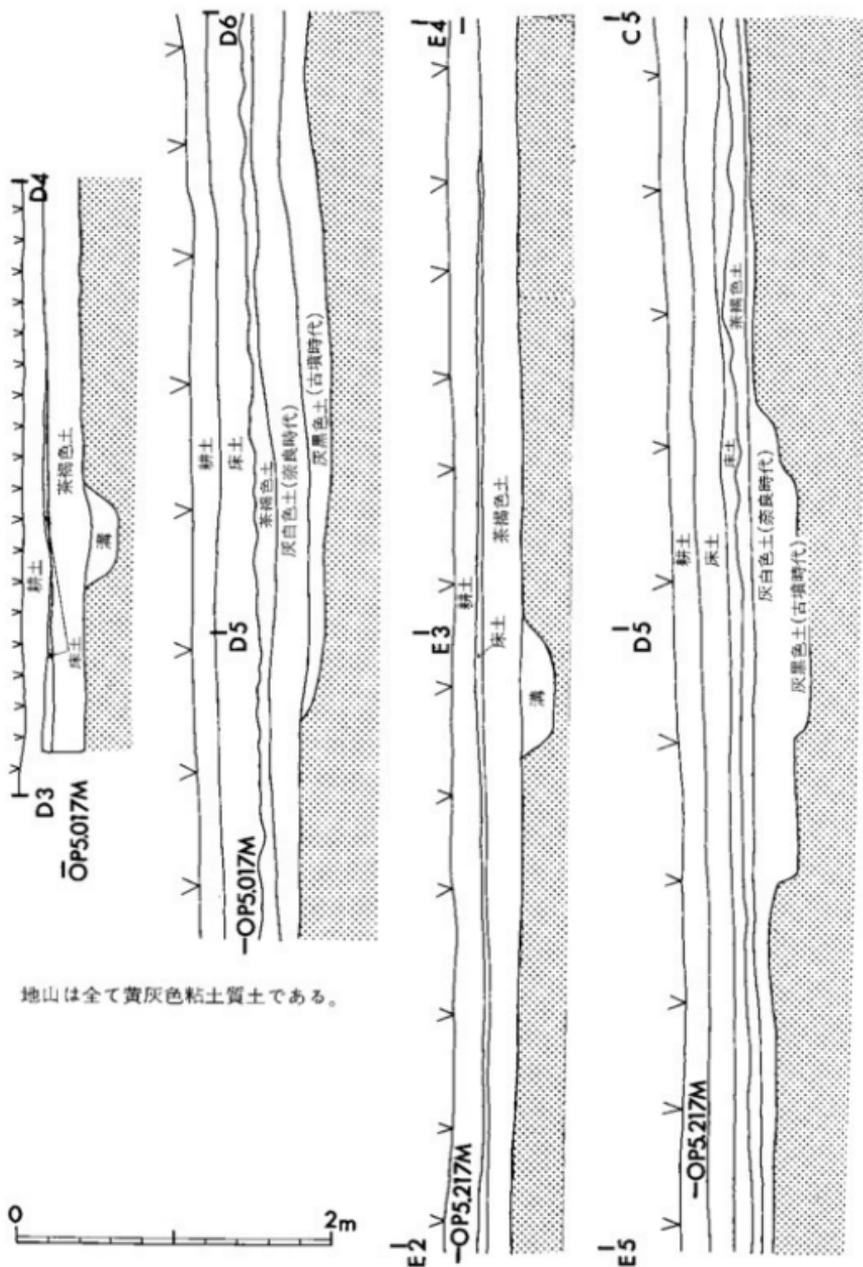


图21 濑田B地区薄一2断面图



第22图 (上·中) 兼田A地区沟断面图
 (下) 兼田B地区沟-2断面图



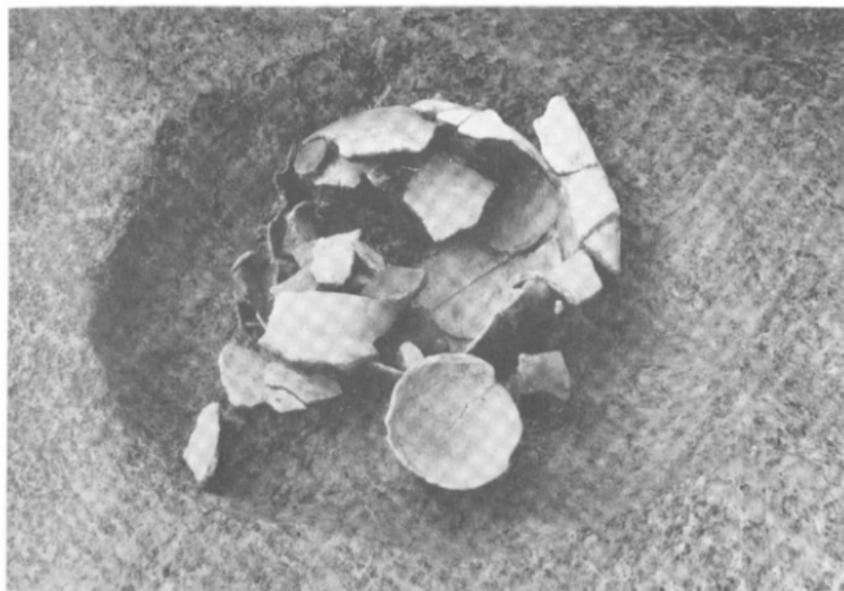
第23図 (1・3) 養田B地区溝1-2断面図
(2・4) 養田B地区溝1-3断面図

(3) 兼田B地区の土塚墓(第25~27図)

東兼田遺跡B地点3-E区ピット状遺構

各地区とも4メートルグリッドを順次掘下げていったが、3-E区においては地表面下約30cmのところ、土師器の埋設されたものにあたった。調査開始もない10月28日のことである。土器の全面検出とともに清掃をおこない、遺構の確認にあたった。この詳細は次記のごとくである。

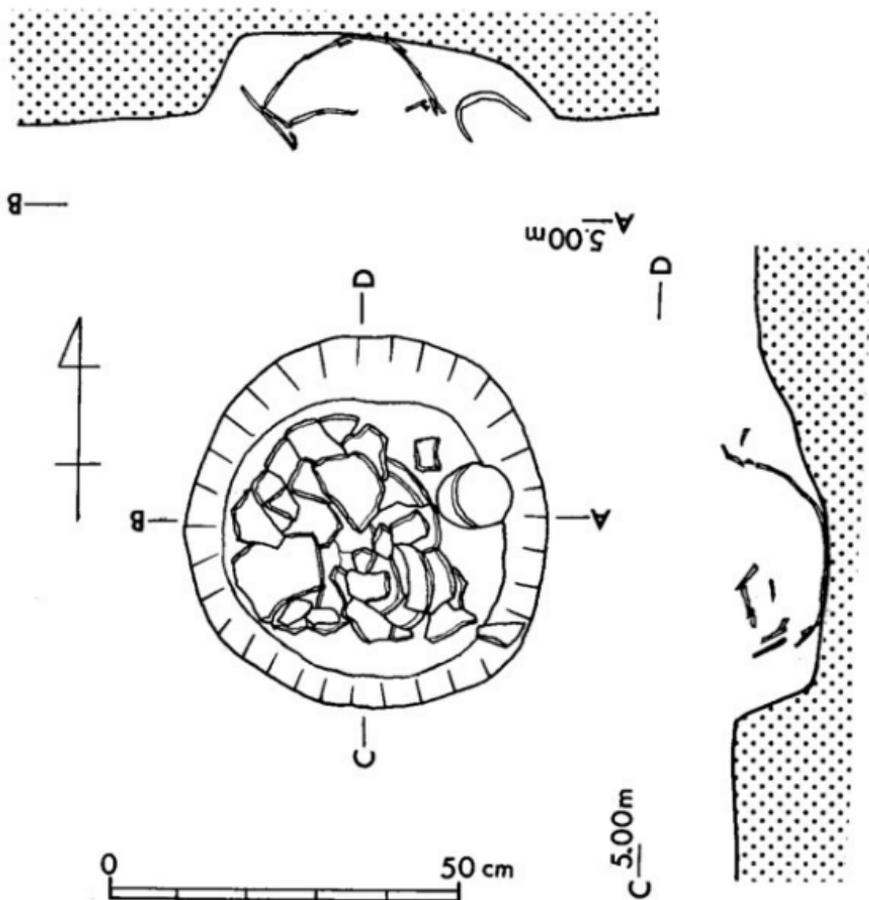
グリッド3-E区の西北隅に近い所であったが、表面直下の耕土約20cmの土壤を除去し、続いて灰褐色の客土約5cmを除き、そのさらに下層のやや淡い黒褐色の腐触土約5cmさがった地点に土師器が口を上部に向けて埋められていたのであった。この器は甕形土器であるがすぐ東にも土師質の鉢形土器が、やや東に倒れかけた状態で伴出した。両土器ともさらに観察すると、極めて強い黒褐色の有機質色含土層を約50cmの円形状に掘込んで、埋設されたものであった。



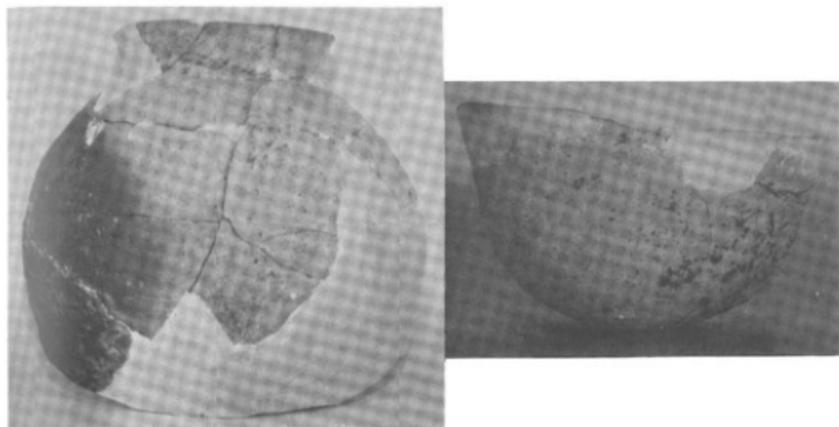
第25図 第1土塚墓土器出土状況

甕形土器・鉢形土器とも内部に何が混入せられていたかは、確認できなかったが、形状から総合判断して埋葬施設に直接関連したものではないかと考えられるのである。あるいは平地部における甕棺葬として埋設され、さらにすぐ東に併置された鉢形土器は、その供献的色彩の強い土器としておかれていたのではないかと推定するのである。甕形土器はかなり破損していたが原形に復元することが可能であり、また鉢形土器もほぼ完形品であった。

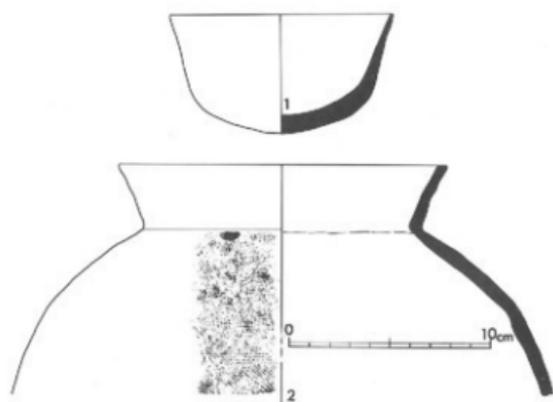
平地部における壺棺・甕棺葬さらに小規模の土塚墓については、播磨地方でも近年漸次報告をみるが、当該遺構もその1例で、埋置の年代を古墳時代でもやや降る時期として考えても、各種埋葬形態を知るうえで貴重である。



第26図 第1土塚墓平面及び断面図



第27图 第I土坛墓出土土器



第28图 兼田B地区第I土坛墓出土遗物

(4) 兼田B地区の土坑

土坑 (図版10、第19図)

土坑は、兼田B地区において4土坑が確認されており、土坑の時期は弥生及び古墳時代にあたる。

(5) 兼田B地区のその他の遺構

ピット (図版11、第19図)

B地区の2F区の地山を掘り込んで造られた幅80cm×50cm、深さ約40cmのV字形のピットである。ピット内の覆土は、下層は薄黒色土上層は暗褐色土が堆積していた。このピット内には、下層の堆積土中に鉢2個が確認された。

土坑 1

この土坑1はB地区の4E区の地山を掘り込んで造られたもので、長径1.2m、短径68cm、深さ26cmの楕円形である。

土坑内の堆積土は暗褐色土で、遺物の包含は認められなかった。

時期は地山を掘り込んだ全体の状況からみて、溝-1と同じく弥生後期にあたるものと思われる。

土坑 2、3

2F区の地山を掘り込んでいるものである。

土坑2は長径60cm、短径40cm、深さ20cmの楕円形を呈している土坑で、底面は平面で立ちあがりは直角である。堆積土は暗褐色土の単一で、遺物の出土は見られなかったが、底面の両端に約20cmの大きさの石1個が置かれていた事を考えると土坑墓の可能性もある。

土坑3は、土坑2と同様に地山面を掘り込んだもので、溝-2によって北半分は切り取られている。長径160cm、短径150cm、深さ10cmの極く浅い楕円形を呈している。

出土遺物は全くなかったが、溝-2が古墳時代の初期にあたるものであるところから、土坑2と同時期の弥生時代と思われる。

土坑 4

土坑4は、2G区にあたり地山を切り込んでいる長径2m、短径50cm、深さ約10cm前後の楕円形を呈している。

坑全体は明確な段落がなく、なだらかに坑底まで掘り込んでいるが、果して土坑と明らかに言えるかどうか疑問である。

坑中には遺物の出土はないが、周辺の地山上には弥生式土器が出土しているところから時期は弥生時代と考えられる。

4. 遺物

兼田A・B地区からの出土遺物は、弥生式土器、土師器、須恵器、土唾、石製模造品、石器などがある。

(1) 兼田A地区溝内出土遺物(図版4、5 第31、32図)

兼田A地区においての土器の出土は、溝内に限られていたので、出土土器についての説明は、一括して取りあげる。

なお、実測図のない遺物については、100番台を付している。

壺形土器(1~4、6~8)

1は口縁端面が大きく垂れ下り、口縁部内面には突帯を2条めぐらしているものである。2の壺は、口縁径が20cmを超えるもので、口縁端面に2条の幅の狭い凹線文をめぐらし、口縁部内面には、断面三角形の凸帯文を1条めぐらし、紐孔を持っている。3、4は口縁径が20cmを超える壺で、口縁下には断面三角形の凸帯文を2条めぐらしている。6は、口縁端部が肥厚で、垂直に垂れ下がり、壺の口縁径は約33cmである。7の壺は、頸部に指頭圧痕文の凸帯文をめぐらしている。8は、頸部に凹線文をめぐらし、器体の内外面には刷毛による整形がみられる。

壺形土器(9~13)

9、13は口縁部径が35cmで、「く」字形の口縁部を持つ大型壺形土器である。13の頸部には、指頭圧痕文の凸帯文があり、器体の内外面は剥離がはげしい。9は口縁端部が厚く、上方に拡張する。器体の内外面とも摩滅がはげしいが、ヨコナデ調整をしている。10~12は、口縁径10~13cm内外の、「く」字形の口縁部をもつ小型壺形土器である。口縁端部は、ヨコナデ手法によって僅かな立ち上がりを見る。胴部の張るもので、器体の外面はヨコナデ手法を用いている。また剥離がはげしい。

大型鉢形土器(5)

口縁径が、30.5cmの大型土器である。口縁端部はほぼ水平面をもち、口縁下に2条の断面三角形の凸帯文をめぐらし、凸帯文上には棒状浮文を施している。器体の表面は摩滅がはげしく、剥落している。胎土は黄褐色を呈している。

底部(14、15)

15は、壺形土器の底部で、内外面とも篋削りの整形仕上である。14は壺形の底部であると思われる。

高杯形土器脚部(16、17)

脚部の下方が急に広がる。内面には篋削りを施している。

円筒埴輪(18)

円筒埴輪片の出土は約300点を数えるが、この18のみが比較的大きいもので、他のものは細片ばかりである。表面の剥離がはげしく、焼成は黄色を呈し不良である。

壺形土器 (100~107、109~121) (図版4、5)

100~107は、すべて口縁端面に幅の狭い凹線文をめぐらす。口縁部内面には、1~3条の凸帯文をもち、100、107には凸帯文中に紐孔をもっている。102は、口縁端面に斜線文をめぐらしている。100の頸部外面には、刷毛調整で仕上げている。他のものについては、剥離がはげしく不明である。109は、7と同様のもので、頸部に指頭圧痕文の凸帯文をめぐらす。114は、頸部下端に2条の凸帯があり、凸帯文より口縁部頸部外面にかけて、刷毛調整を施している。121は、口縁下端の斜線文上に、円形浮文を縦に3個飾っている。なお、頸部の凸帯文上に棒状浮文をめぐらしている。

A地区溝内出土須恵器 (第32図)

杯 蓋 (19、20)

口縁端部は下方へ短く屈曲し、先端は鈍い稜をなす。内面はヨコナテ調整を施している。

杯 身 (21~25)

高台をもつ杯で、高台はあまり高くなく、僅かに外方へ張るものである。口縁部はヨコナテ調整である。

椀 (26、27、36)

口縁径12~13cmのもので、内外面ともロクロ引きの痕を明瞭に残している。

底 部 (28~31)

回転糸切り平底である。

高杯脚部 (34)

脚端部は、端面の上下が伸びて段をなすもので、2段の透かしをもつものである。

(2) 兼田B地区の出土遺物

B地区においての出土遺物は、溝-1、溝-2、溝-3、ピット内、地山堆積土中よりの弥生式土器、古式土師器、須恵器などである。

溝-1出土遺物

この溝は弥生時代から古墳時代のもので、溝内に堆積している土層の最下層中には弥生式土器、上層には土師器のみを包含していたので、上層下層の区別をして取りあげる。

溝-1下層出土土器 (第33、34、35、39図、図版19~25)

壺形土器 (第33図、1~4、7~9)

3は口縁部内面に2条の凸帯文をめぐらすものである。4は、外反する口縁で肩が下がっている。内面は頸部から胴部にかけて、2段の輪づみ痕を残している。器体の内外面とも篋削りで、調整仕上げを行なっているので、外面は非常に研磨されている。8、9は壺の底部で、8の内面は刷毛で調整されている。外面は、剥離がはげしく不明である。9は外面を篋削りで調整を行ない黒斑がある。7は、複合口縁をもつ器高45cm、胴部最大径36cmの壺形土器である。口縁部は、

上方に立ち上がる受口状のもので、口縁受口状の部分に2条の凹線文がある。頸部下端には指頭圧痕文の凸帯文が施され、口縁部及び頸部は、横の方向に細かな刷毛をかけている。胴部には荒い縦方向の叩目を施し、頸部、底部は縦方向の刷毛をかけている。なお底部の刷毛目は、殆んど消されている。内面は刷毛によって調整され、底部は平底で木葉圧痕文である。

壘形土器（第33図12、第34図13～15、第35図32、34、35）

13は肩部から口縁部を欠き、胴部は丸みをおび、外面は全体に荒い叩目をつけて全面に煤の付着がある。内面は刷毛による調整が行なわれている。14は、完型器である。頸部から急に口縁部へ大きく外反し、胴部は丸みをおびているが張りが少なく、外面は、頸部から底部までの全体に荒い叩目を施し、全面に煤の付着がある。内面は刷毛で調整している。15、32、34、35は、口縁端部が丸みをもって緩やかに外反するもので、口縁径が15cm前後の甕である。32、34、35の内外面は、篋調整を行なっている。15は、外面に頸部から胴部に荒い横の叩目を施し、胴部から底部に向かって、篋調整を行なっている。全体に煤の付着がある。

底 部（第34図12、16～18、20～23、25、26、27、第39図51、57）

12は、横方向に荒い叩目がある台付甕の脚台であろう。16は、外面に縦の荒い叩目を施している。17、18は外面の剝離がはげしい。23、25の底面は平底で、25の外面は叩目があつて煤の付着がある。23の外面半分には黒斑がある。20の外面は、縦に篋で調整されている。51の底面には圧痕が残っている。57は平底で、外面に荒い叩目があり内面は篋によって調整されている。22、26、27は底面中央部に一孔がある甕であり、これらの外面には縦にちかい荒い叩目が施され、26の内面は、篋削りで調整されている。

鉢形土器（第33図1）

口縁径26cm、高さ6.5cmで、口縁部が外反する鉢形土器である。胴部から底部にかけての器体の外面は、篋削りによって調整されている。胎土は精選され乳褐色を呈している。焼きは良好である。

高杯形土器脚部（第35図38～40）

39の中ふくらみになった柱状部は、やがて急に下方へ拡がり、胎土は砂粒が多く含まれている。40の端部は稜をなし、断面は角形を呈し、外面は篋削りによって調整されている。

溝一上層出土土器（第33、35図、図版19～21）

壺（28）

長く外上方へ開く口頸部で、口縁上端は、内側に緩い段をなして折れ曲る。やや上方で、肩の張った体部である。外面は刷毛目を施している。肩部より下の刷毛目は、乱雑に重ねられ刷毛目は短い。口縁径17cm、器高29.6cm、胴部最大幅25.5cmの壺である。

壺（29、30）

口縁部は僅かに外する。29の体部は、球形で器壁は底部に行くに従って厚くなり、底面は平底である。外面は刷毛目で調整されている。30は扁球の体部である。内外面とも頸部より上部に刷

毛目を残している。

甕 (10, 31)

10の甕は、外面が凹凸のはげしい剝離がある。31の甕は短く外反する口縁で、口縁の上端を撫でている。その断面は丸い。球形の体部で、外面は刷毛目によって調整されている。

甕 (第35図33)

緩く外反する口縁部で、口縁上端面は水平である。肩の張らない体部で、剝離がはげしい。

高杯 (第35図41～43, 87)

41は口頸部上方で内弯し、上端は僅かに外反する。比較的整った小型の脚で、柱状部で緩く拡がり、下方でラッパ状に拡がる。脚端は丸くおさめている。3孔を柱状部下方につけている。全体に表面の剝離がはげしい。42、43は口頸部が緩く上方へ拡がる。杯部の端部は欠けている。43は内外面とも杯部に、細い刷毛目を左より右斜め下方につけている。42の脚部の外面は、篋削りの痕を僅かに残している。3孔を柱状部下方につけている。87は、外面が篋の刷毛目で調整された脚部で、胎土は赤褐色を呈している。脚中央部に、3孔あけている。

B地区第1土坑墓出土遺物 (第28図)

2は短く外反する口頸部で、口縁端部は水平に近い。胴部は、やや上方で肩が張った球形の体部である。外面の肩部と胴部下方は、左から右下方向に下がった刷毛目調整で、胴部中央部は、横方向の刷毛目調整である。口縁径は16.3cmである。1は、鉢形土器で口縁部がやや外反している。口縁径11cm、器高6cmの黄色を呈している。内外面とも剝離が甚だしく、ぼろぼろである。

B地区2Fピット内出土遺物 (第24図、図版25-1)

1、2とも鉢形土器で、1は口縁径11.5cm、器高5cmで口縁端面は丸く、浅い椀状の器体である。2は大型の鉢で、口縁径26.8cm、器高11.5cmで、口縁外面下端部に稜線をもつ。

溝-2出土遺物 (第36図5、7、図版23の上)

高杯形土器

5、7は外反する杯口縁部と、外弯する杯部下半で、口縁は丸くおさめている。6は、口縁端面に1条の凹線文が入っている。8は高杯の脚部で、下方に大きく拡がり、端部の断面は角形を呈している。3、4は甕口頸部である。

B地区2G区出土遺物 (第37図1～3、図版25)

この地区からの遺物は、黄褐色の地山土から出土したものである。1、2、3は甕で、「く」字形に外反するものである。1と3は、外面を刷毛目で調整している。2は大きく外反する口頸部で、体部は球形状のものである。外面は横方向に、荒い叩目を施している。

壺形土器

口縁端部が大きく外反するもので、口縁端面が垂直に垂れ下がる。頸部には、3条の凸帯文を施している。内外面とも非常にもろくなっている。6は高杯の脚部で、下方で大きく外反するもので、端面は丸くおさめている。

B地区出土遺物（第38、39図 図版23、24、25）

ここで取り上げる遺物は、B地区全体から出土した遺構面に伴わなかったもので、地山（黄褐色土）より上層の土層から出土した一括遺物である。44、63は外反する口縁部と、外弯する杯部下半で、44は杯口縁部と杯下半部の界に屈折部がある。45、46、49、52、64、65は壺である。46は口縁端部内面に段をなし、口縁端面には直線文がある。肩部には縦の刷毛目がある。49の壺は短く内弯する口縁で、球形の体部の外面は、横の刷毛目をつけている。52は口頸部が垂直に立ち上がるもので、口縁端部を丸くおさめている。体部は球形を呈し、口頸部より体部に縦の刷毛目をつけている。64、65は口頸部が「く」字形に大きく外反し、口縁端部は立ち上がる。48は壺で、肩球状の脚部で、脚の外面には下方に縦の刷毛目を残している。内面は輪積み痕を残している。54～61は平底の底部で、60は底面径が13.4cmで、2条の木葉文がある。61は、右から左下に向けて印目を施した上に、縦の刷毛目を残している。53は口縁径6cm、器高3.5cmのミニチュア土器である。

鉢形土器

60は、口縁部が内弯したもので、口縁下に2条の凹線文をめぐらし、凹線文上に刻目文が連続して施されている。67、68の口縁端部は、いずれも内外に拡張して、端面は水平面をもっている。

B地区出土須恵器（第40図、図版18）

須恵器は、4ラインより南地域の地山より上層に包含されていた遺物で、すべて遺構面に伴っていない。

杯身（69～73、76、81）

69～73、76の立ち上がりは矮小化し、全体的に浅く扁平に近いものである。80は、口縁径の小さなものである。口縁部は外傾して端部は丸くおさめている。内外面ともヨコナデ調整である。81は、高台をもつ杯で、貼付け高台はあまり高くなく、脚端面が僅かに外方へ踏ん張るものである。内面はヨコナデ調整で仕上げている。

杯蓋（74、75、78、79）

74、75の天井部は扁平である。天井と口縁部を分ける稜線は、鈍いものである。78、79の口縁部は、下方へ短く屈曲し、先端は鈍い稜をなしている。内面はヨコナデ調整で仕上げている。

高杯脚部（84）

2段透しのもので、2方のものである。脚端部は、端面の上下が伸びて段をなしている。

長頸壺 (85)

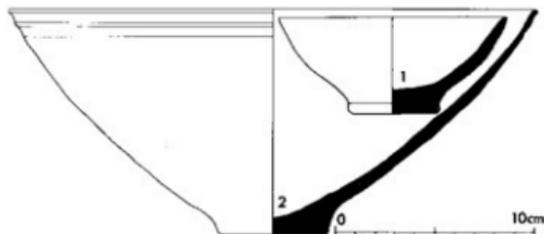
全体に細長い頸で、頸と体部接合部は狭少で厚く、口縁部に近づくに従って薄くなっている。口縁部は外反して拡がるものである。頸部中央に浅い凹線文を2条めぐらしている。表面は薄い緑色の灰釉がかかっている。

大型甕 (86)

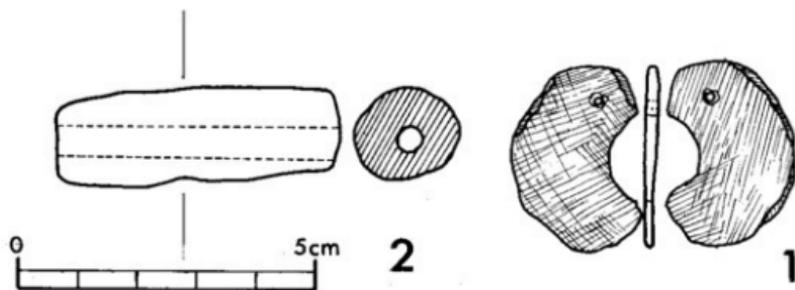
口頸部の長い大きく外反するもので、口頸部の端を下方へ屈曲させている。口頸部表面は無文で、全体に灰黒色の灰釉がかかっている。

鉢 (83)

短い口縁部は外反し、口縁端は上下に拡張している。体部でやや厚くなり、内外面ともロクロ目を良く残している。底部は丸底である。



第24図 兼田B地区2-F Pit内出土遺物



第30図 兼田B地区出土土鐘、滑石製勾玉

〔石器〕（図版26の(1)～(4)、第29図）

石器は、兼田A、B地区で4点出土しているのみである。次にこの4点について記述する。

1. スクレーパー（B地区、2F溝内底部出土）

安山岩系の角礫を素材とした縦長剥片に階段状の剥離を加え、刃部をつくりだしており先端部に丹念な剥離がみられる。なお、一部に研磨による面取りを行った部分の存在が認められる。

2. スクレーパー（A地区溝内出土）

サヌカイトを原材とする全長6cmのスクレーパーであり、打撃痕を残す。剥離は両面より行なわれ、えぐりを作成している。風化が著しく白灰色に変化している。なお、根元部分は欠損している。

3. スクレーパー（B地区 2D区出土）

サヌカイトを原材料とする全長3cmのスクレーパーである。剥離方法は、2と同様の両面よりの剥離が見うけられる。また、根元より折れているのも同様である。

4. フレーク（A地区 黒褐色土出土）

全長5cm、良質頁岩の円礫を原材とし、黄褐色を呈する。典型的な横長剥片を使用したフレークであり、一部分に使用に伴う刃こぼれが認められる。

5. 土 錘（図版26、第30図の2）

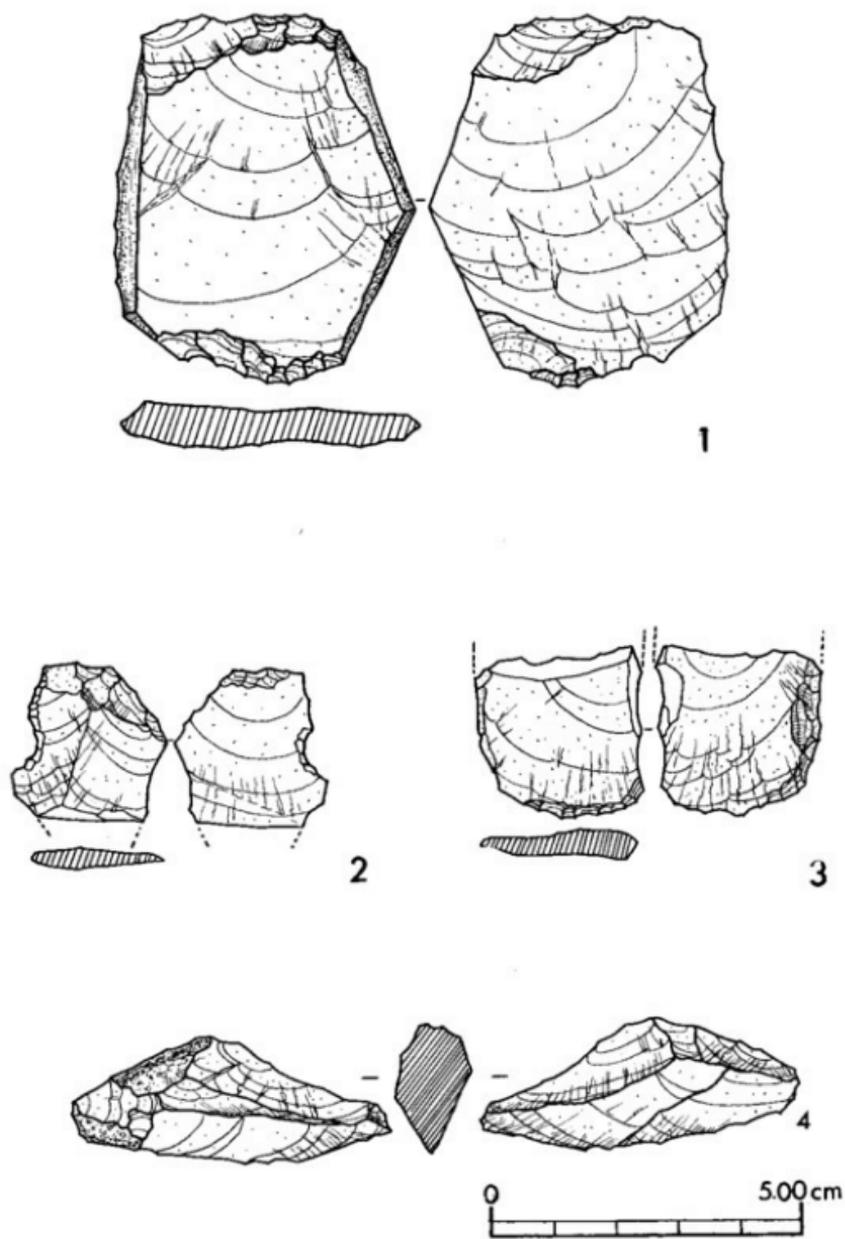
土錘はB地区の4F底部から1点のみ出土している。淡赤褐色で焼成され、全長4.8cm、径1.5cmで、中央部に径4mmの穿孔が貫通している。

6. 石製模造勾玉（図版26、第30図の1）

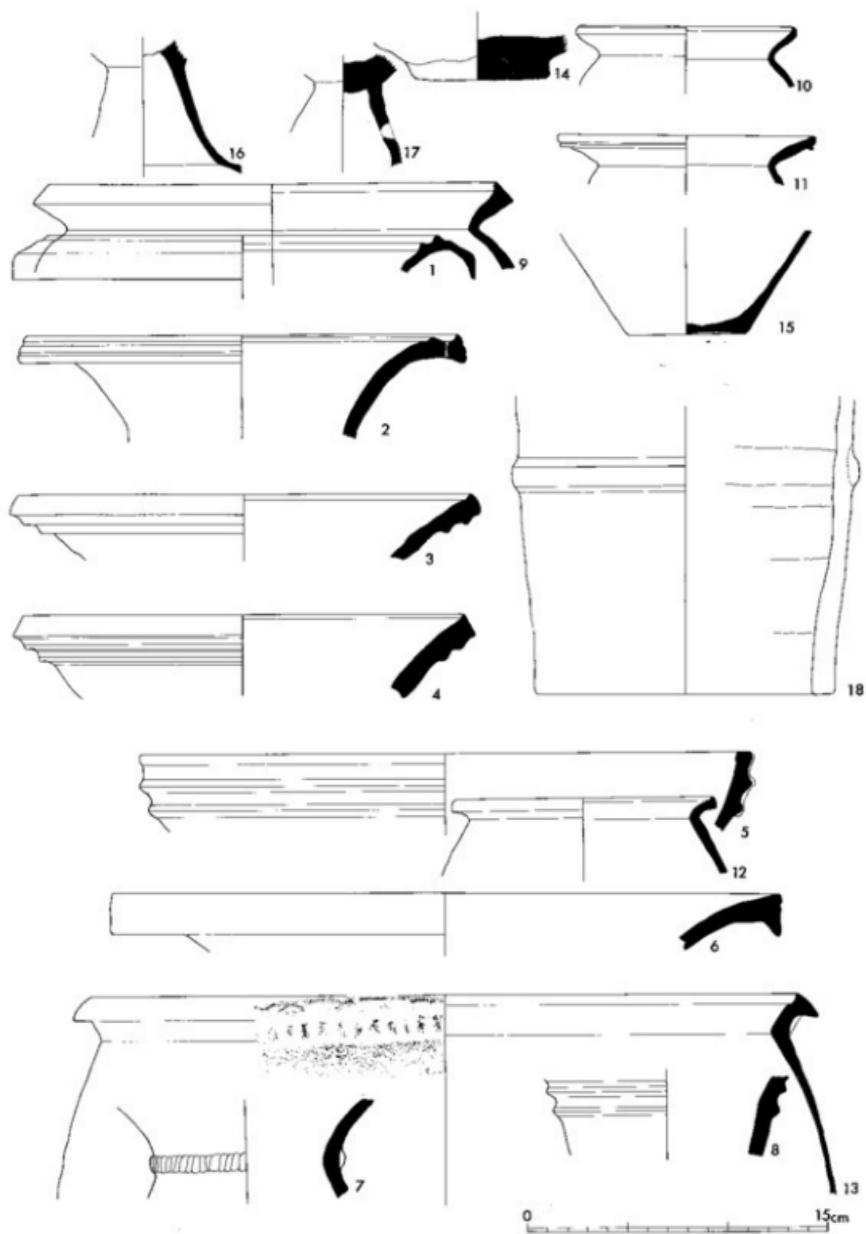
滑石製の模造勾玉で全長3.1cm、径1.6cmの断面平板状のものである。頭部には、両面からあけられた一個の穿孔がある。

なお、兵庫県内で現在までに出土している祭祀勾玉は次のごとくである。

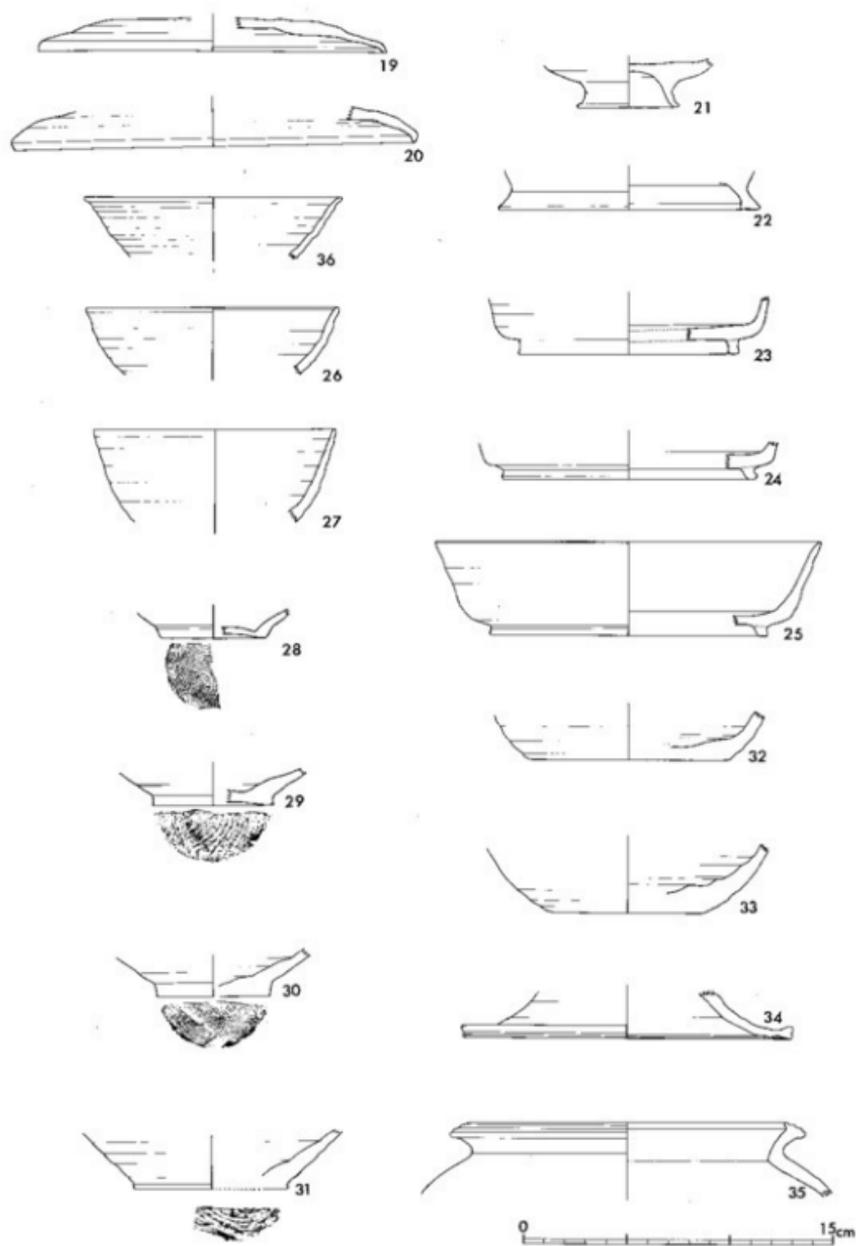
番号	所在地	出土品	備考
1	淡路伊佐奈岐神社境内	勾玉、管玉、切玉 石製模造品（斧、刀子）	大場益雄 「神道考古学論叢」
2	神戸市垂水区五色山 五色塚古墳	子持勾玉4	赤松啓介、喜谷美直 「月刊文化財」
3	水上郡柏原町新屋敷湯森	子持勾玉	兵庫県神社誌
4	水上郡黒井町黒井	〃	〃
5	尾崎市下坂部	勾玉	
6	上郡町中山12号墳	〃	
7	姫路市小山	子持勾玉	今里幾次 「考古学研究」



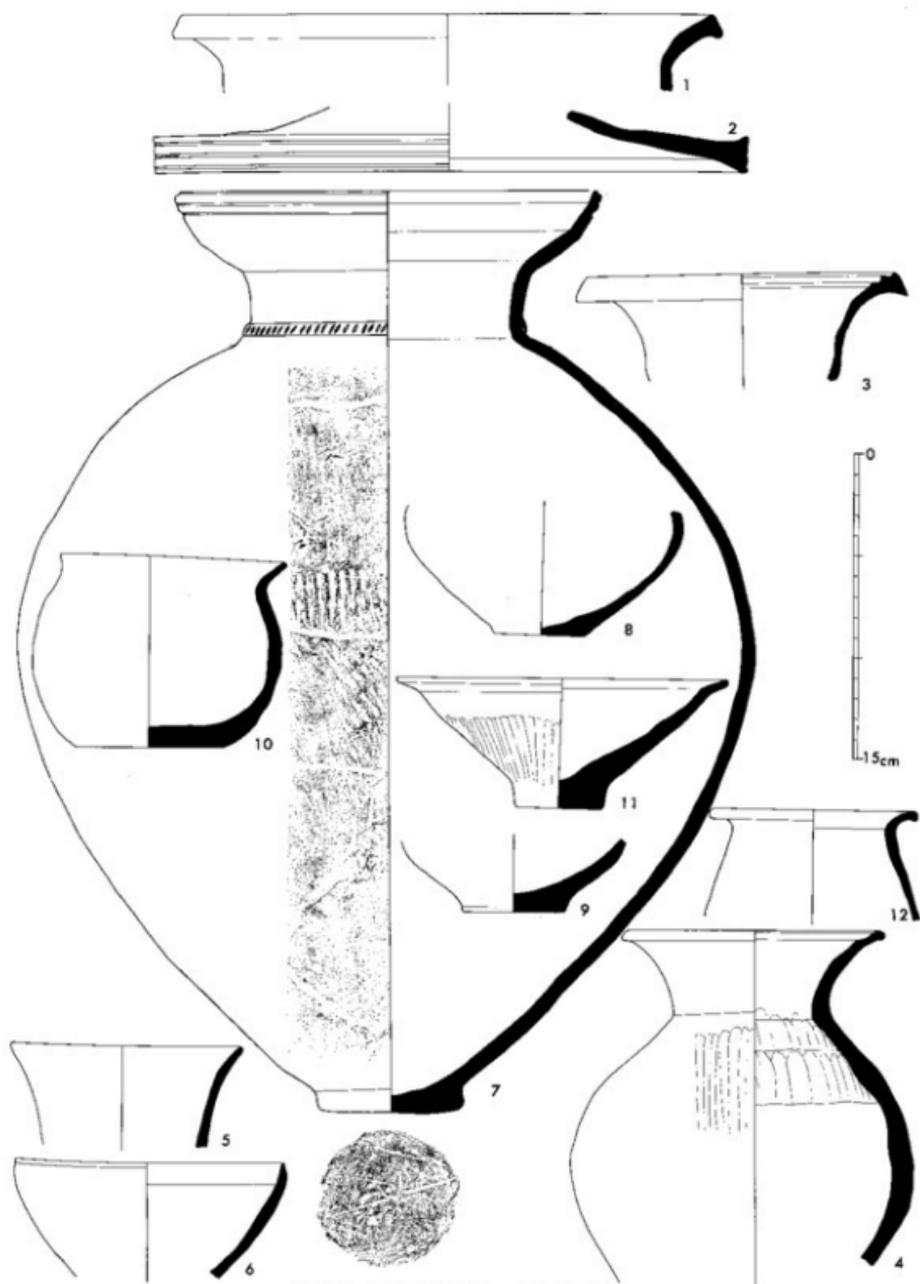
第29图 兼田 A、B地区出土石器



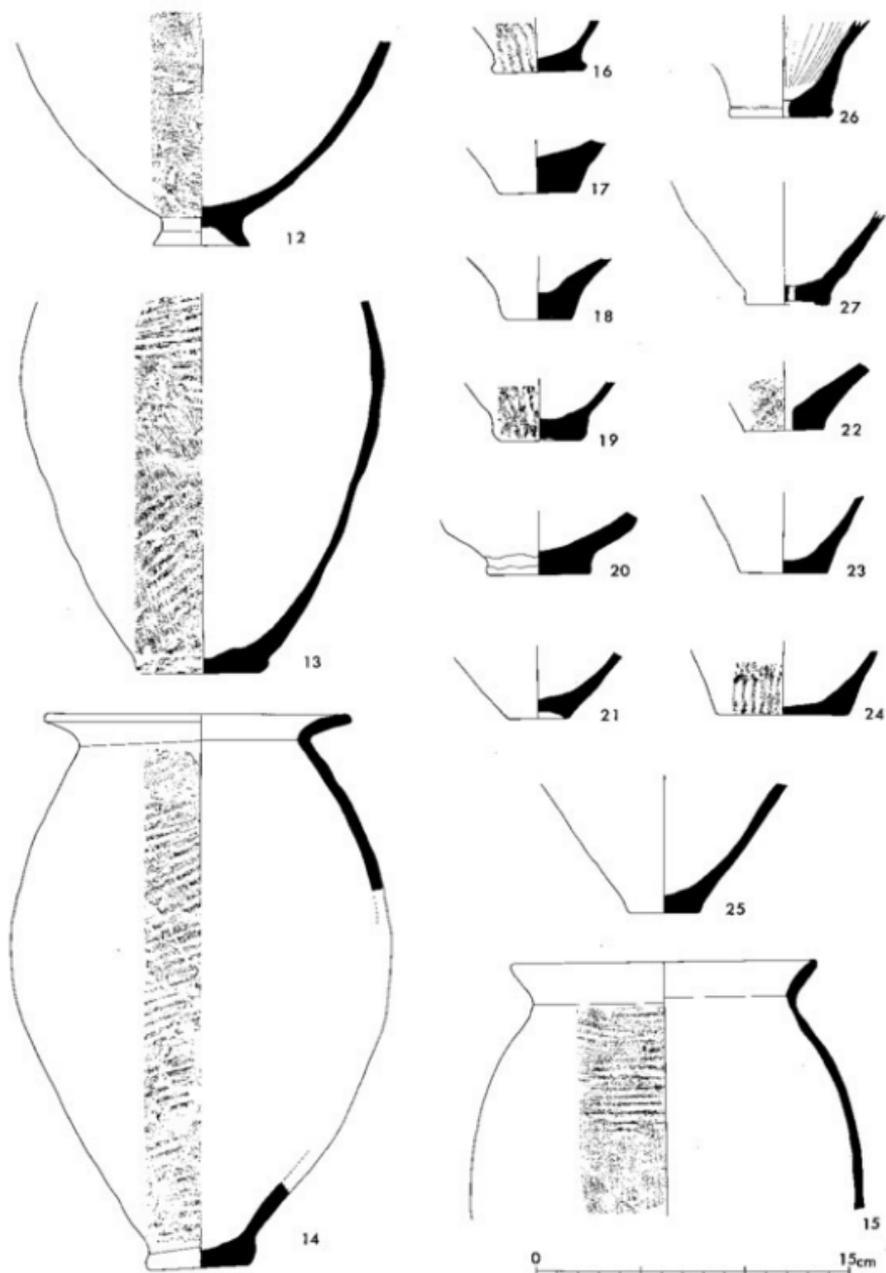
第31图 兼田A地区溝内出土遺物



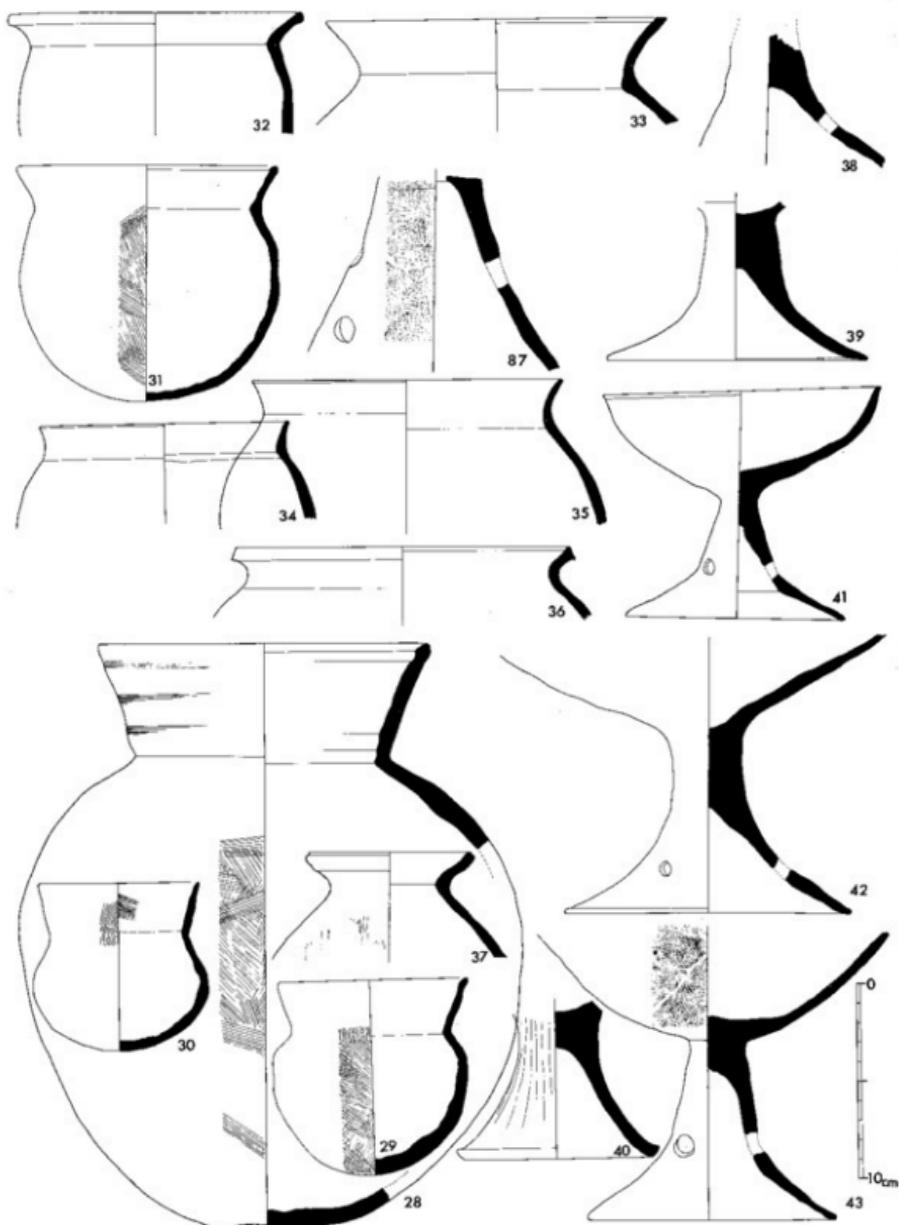
第32图 兼田A地区溝内出土遺物



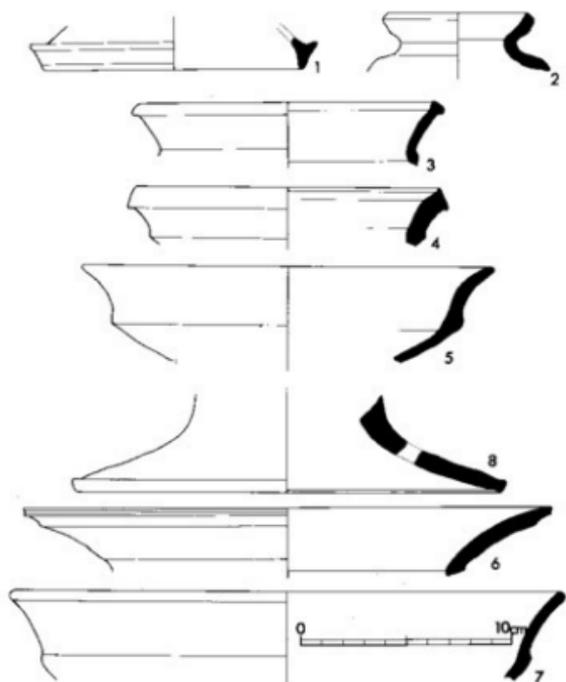
第33图 兼田B地区溝一I出土遺物



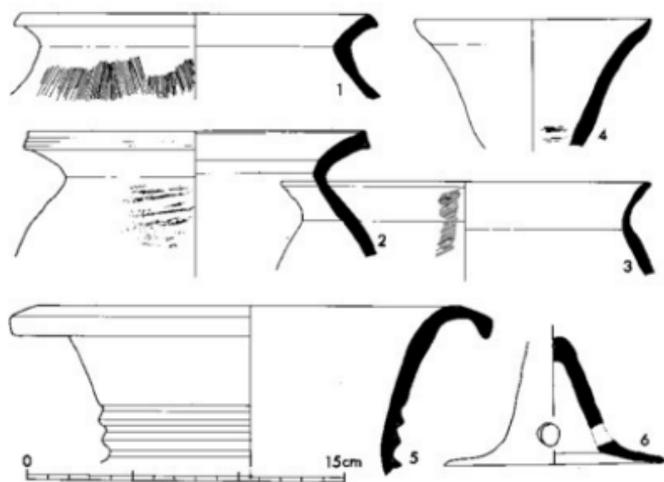
第34图 兼田B地区溝一I出土遺物



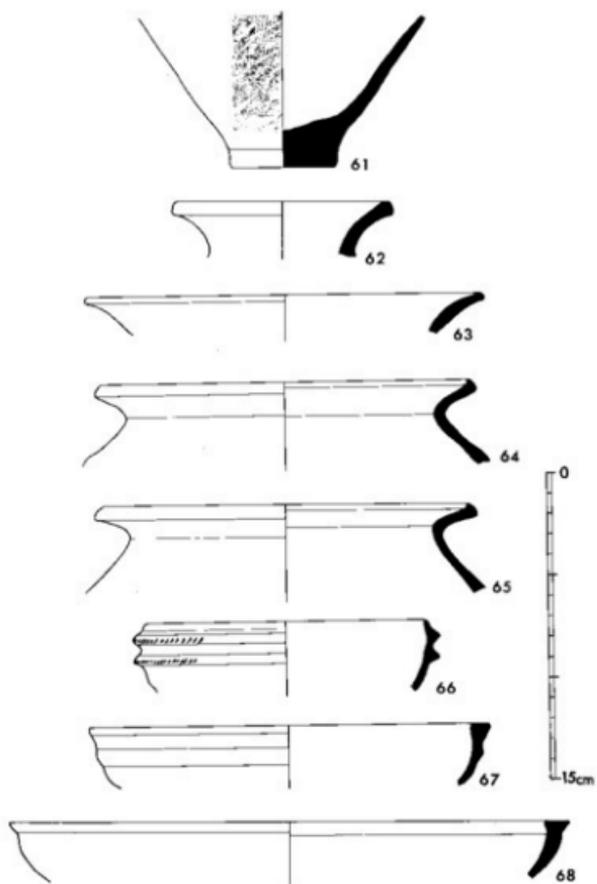
第35图 兼田B地区溝内出土遺物



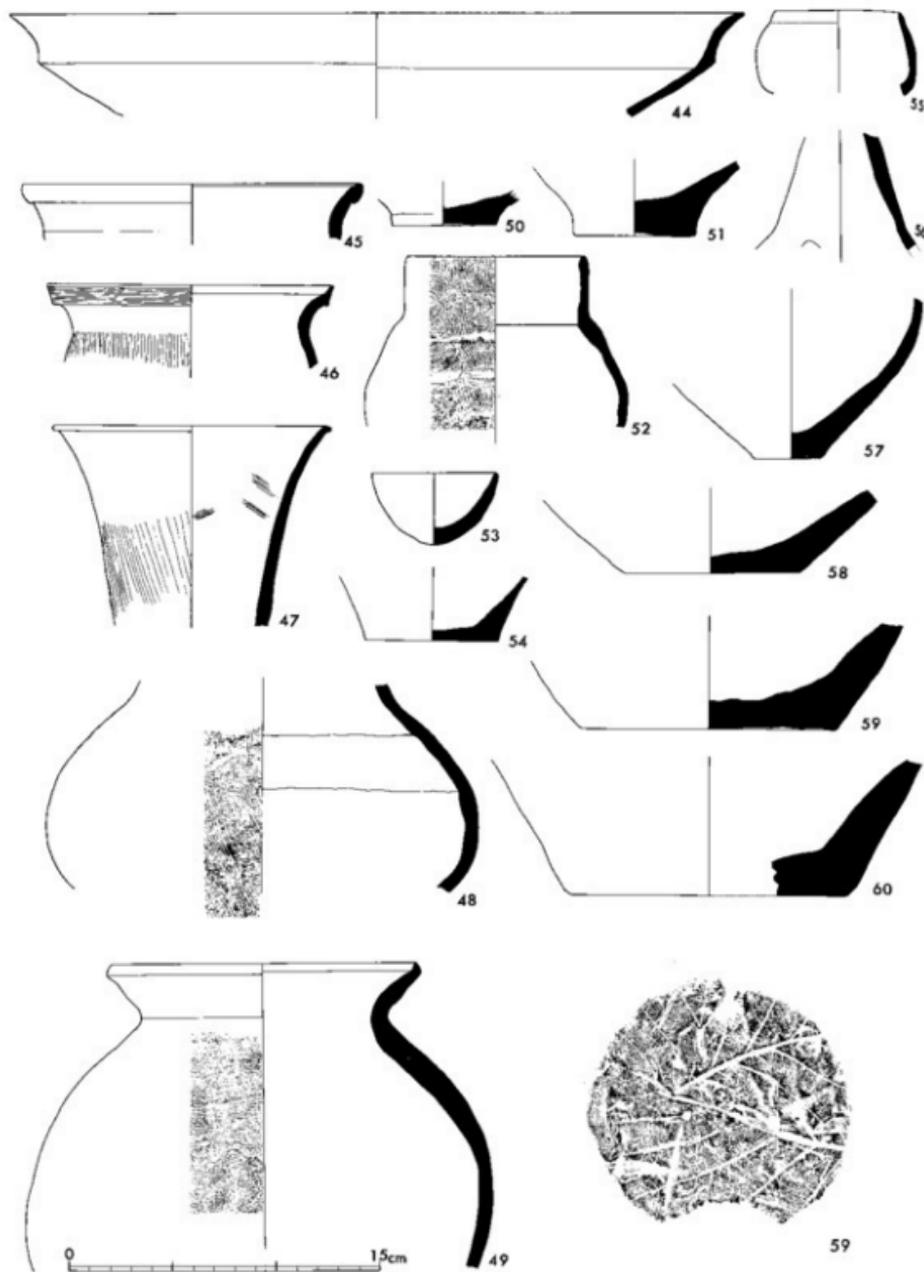
第36图 兼田B地区溝2出土遺物



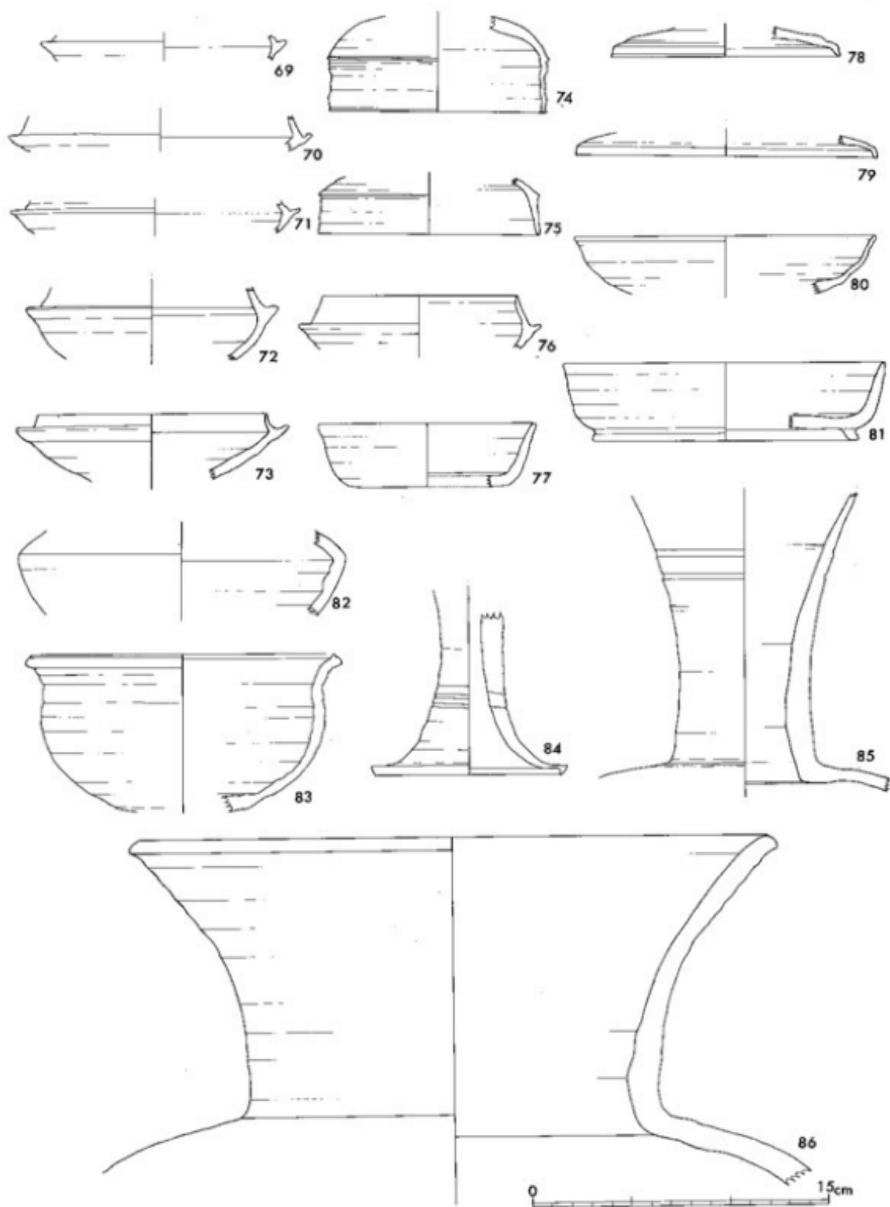
第37图 兼田B地区2G区出土遺物



第38图 兼田B地区出土遗物



第39图 兼田B地区出土遗物



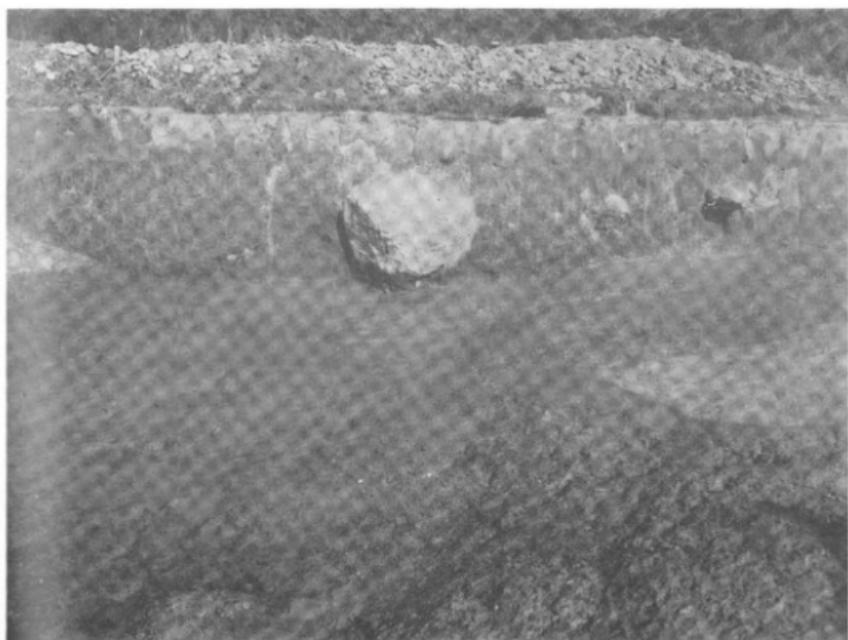
第40图 兼田B地区出土须惠器



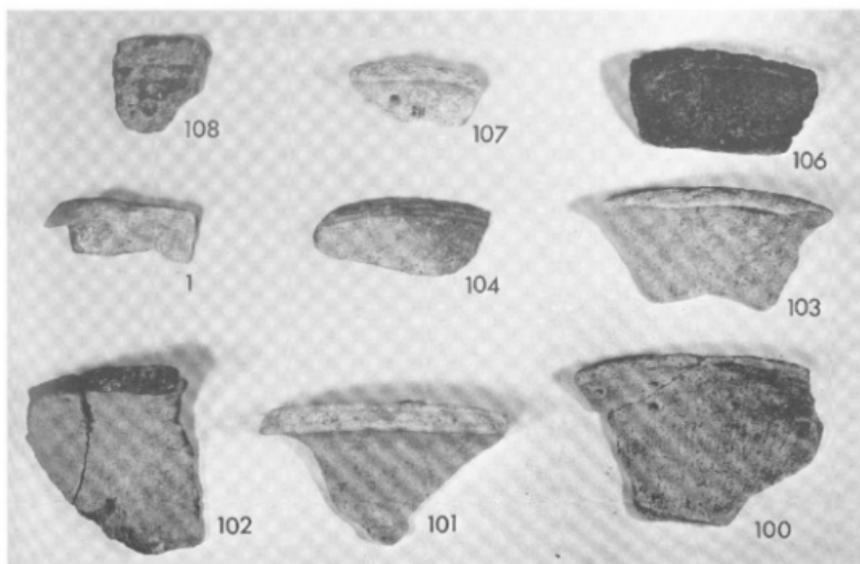
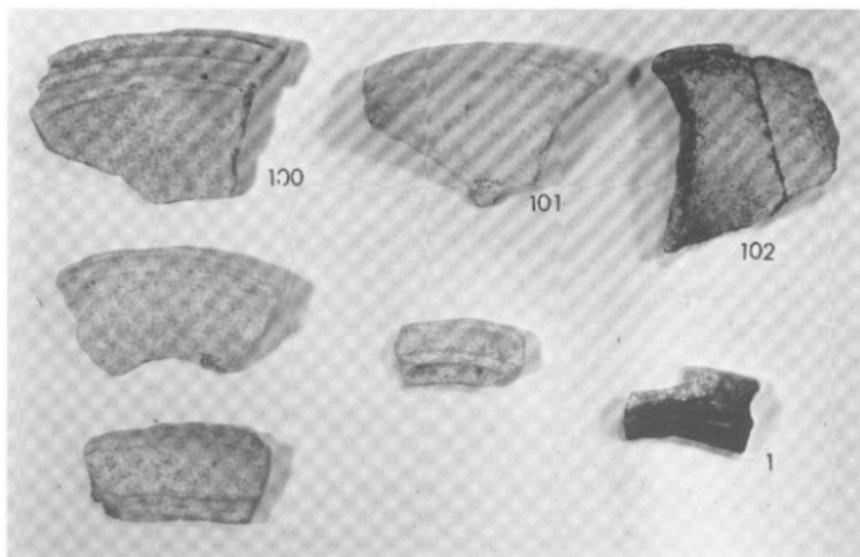
(上) 兼田A地区東より遠影 (下) 同西より



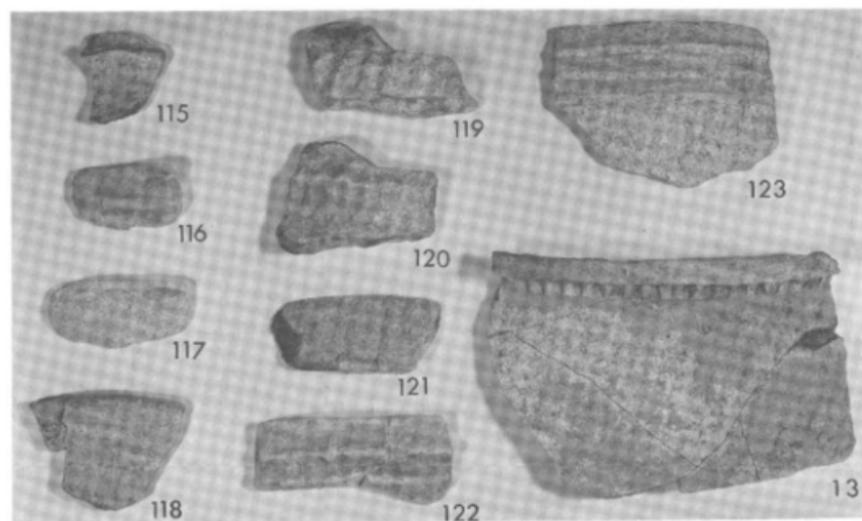
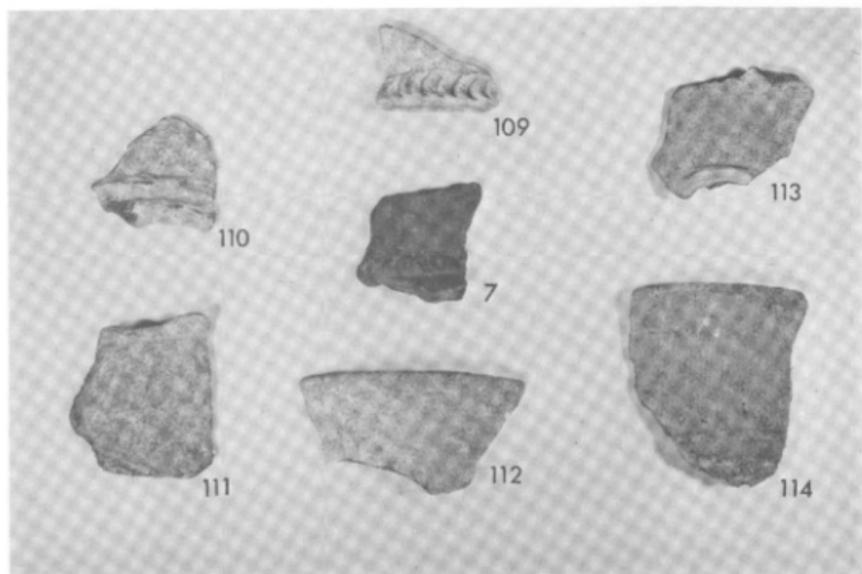
(上) 兼田 A 地区区画設定 (東より)
(中) " 調査終了後 (南より)
(下) " 溝調査中 (西より)



(上) 兼田 A 地区調査後 (下) 同清断面



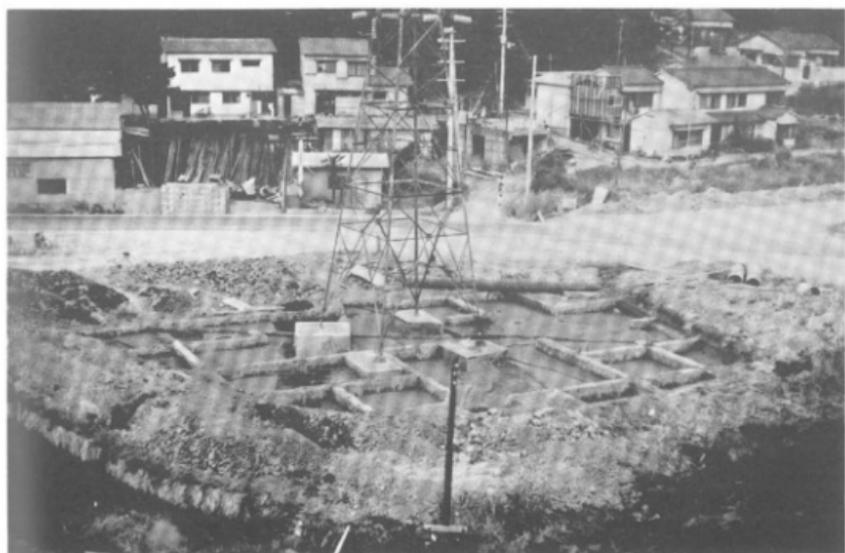
(上・下) 兼田A地区溝内出土遺物



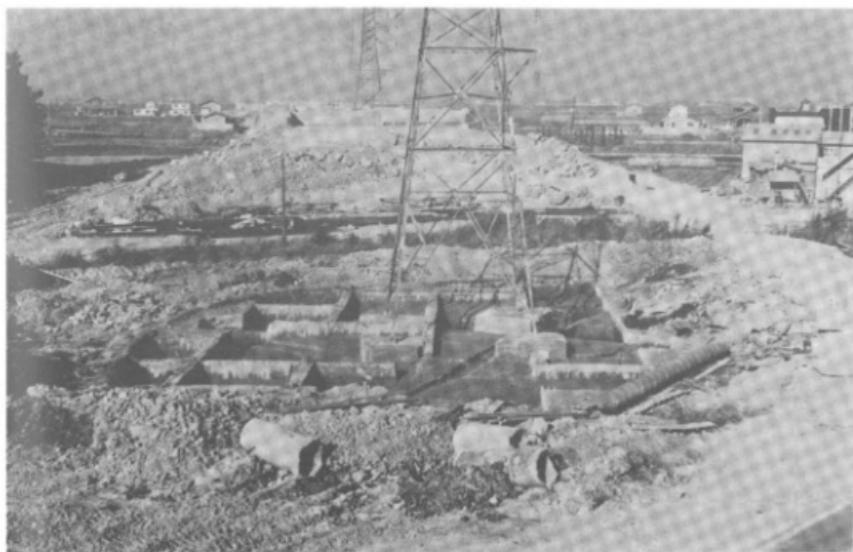
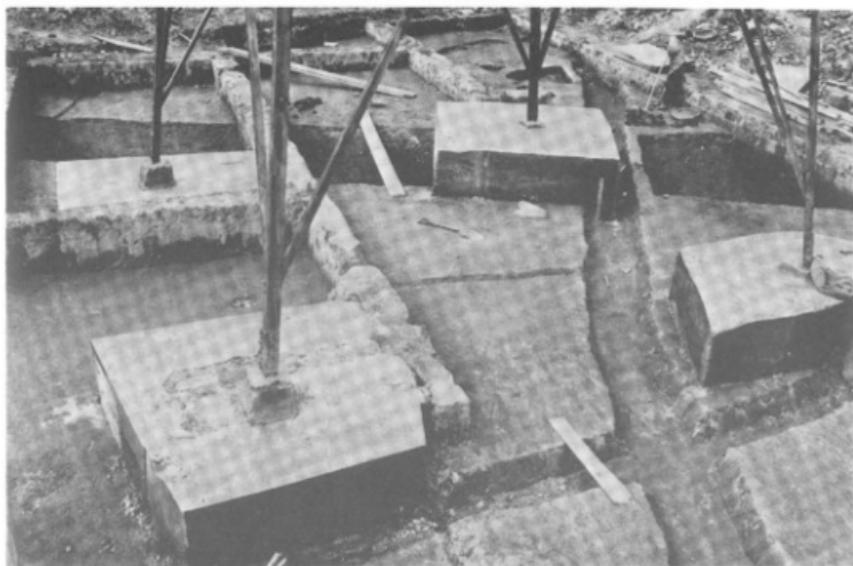
(上・下) 兼田A地区出土遺物



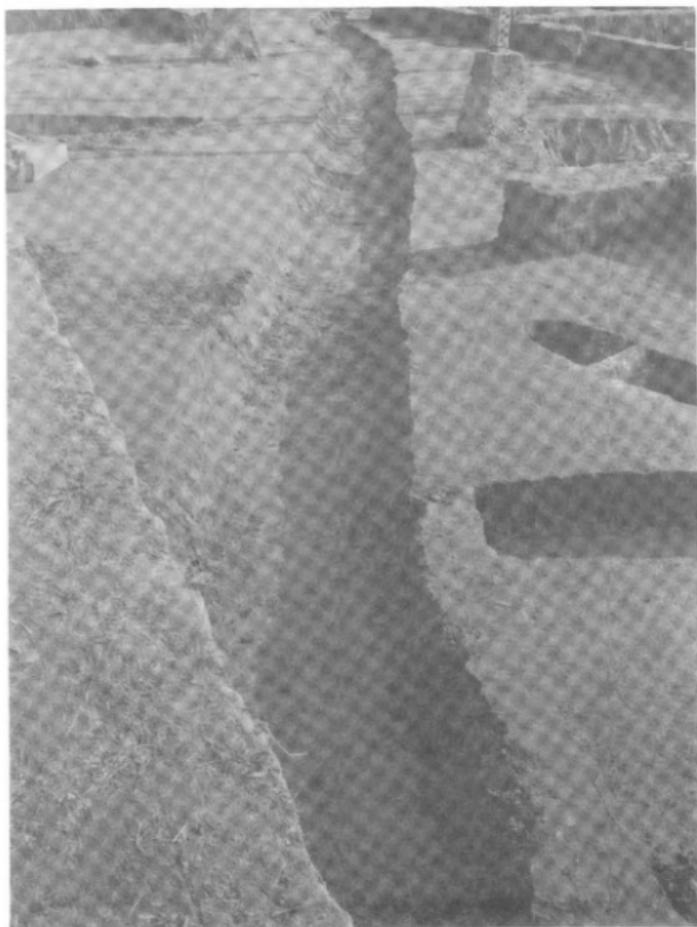
(上) 兼田B地区遠影南より (下) 同東より



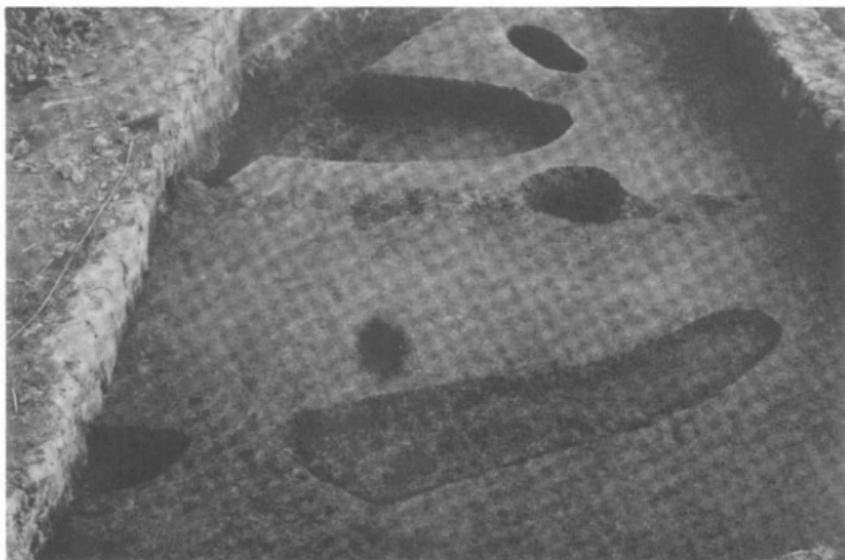
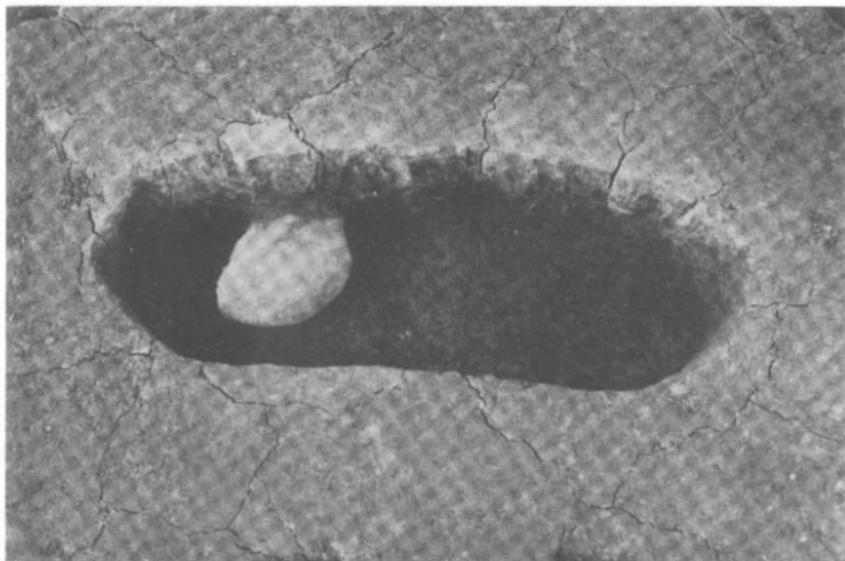
(上) 兼田 B 地区調査中 (下) 同調査後



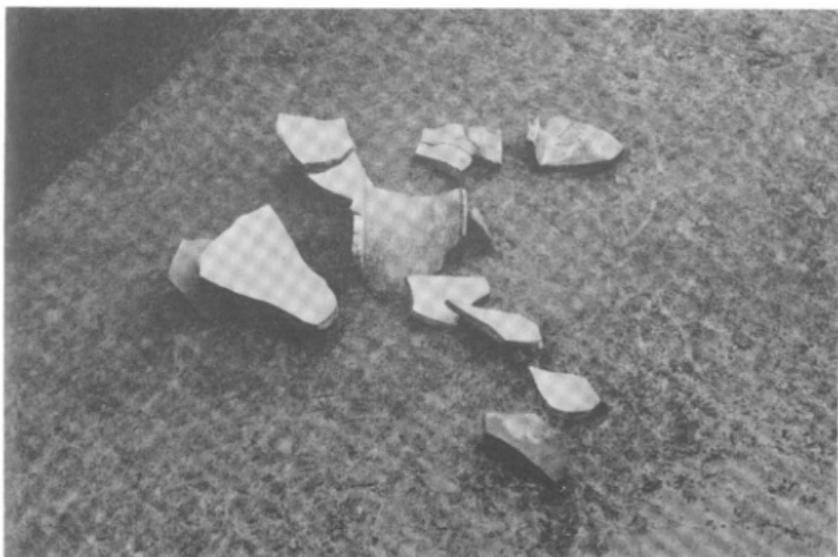
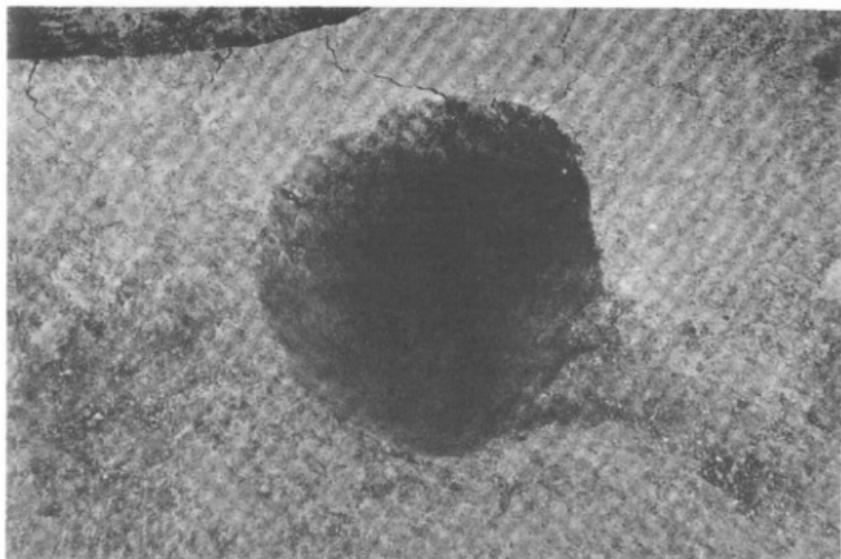
(上) 兼田 B 地区調査後 (下) 同



兼田B地区 溝一



(上) 兼田B地区2のF土坑
(下) 兼田B地区2のF、G、土坑およびピット



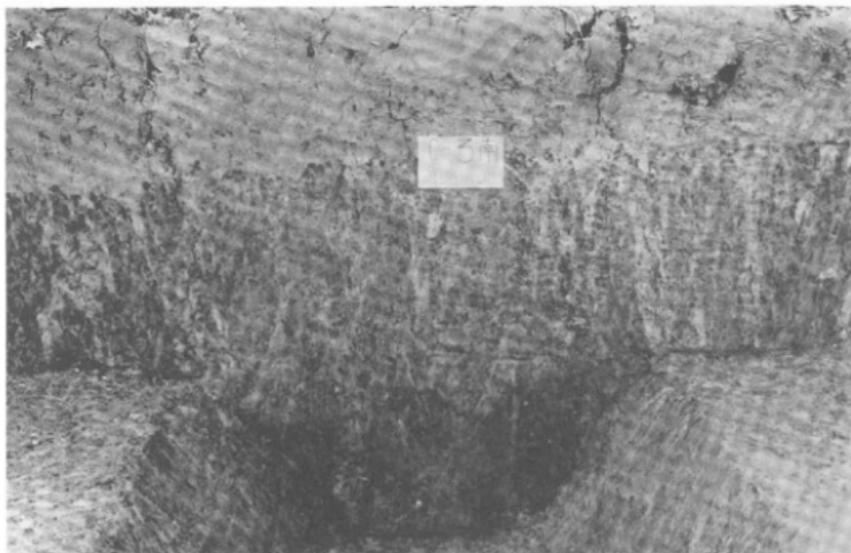
(上) 兼田B地区2のF区ピット
(下) " 5のE区須恵器出土状況(奈良時代)



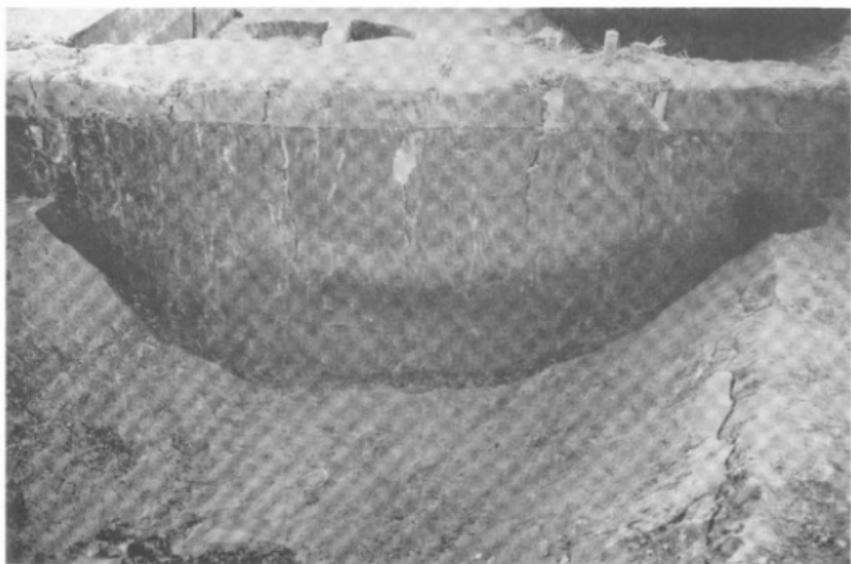
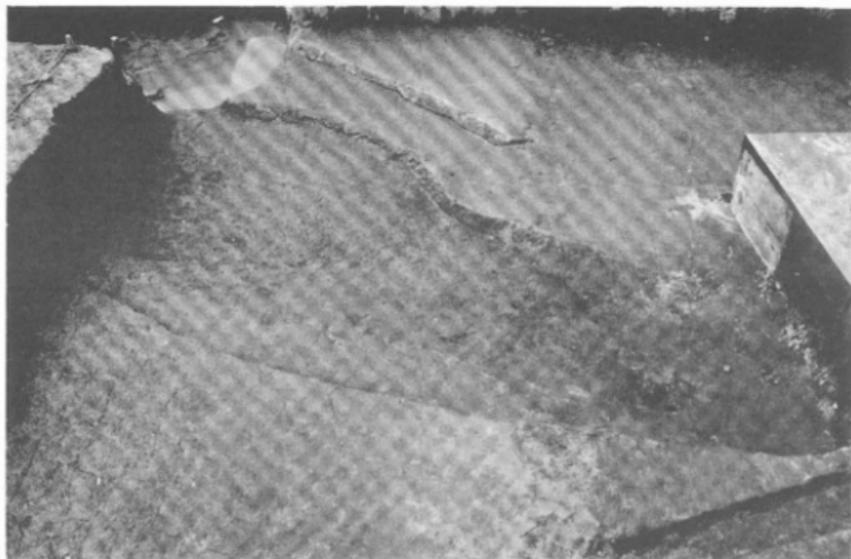
(上) 兼田B地区3のC区溝
(下) " 4のB区溝



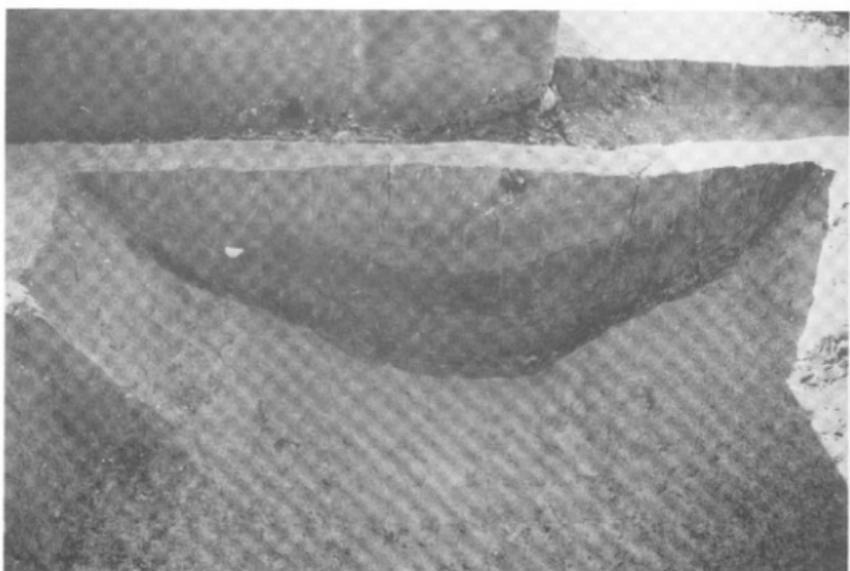
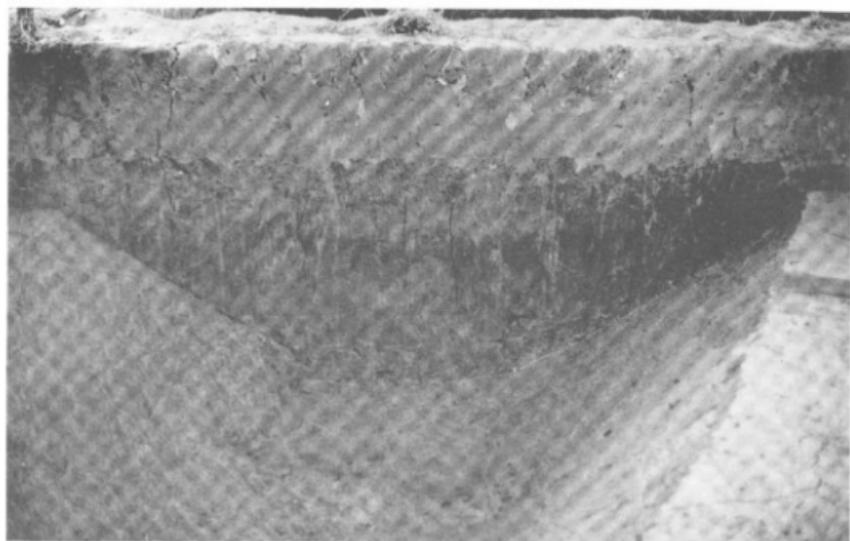
(上・下) 兼田B地区溝内出土状況



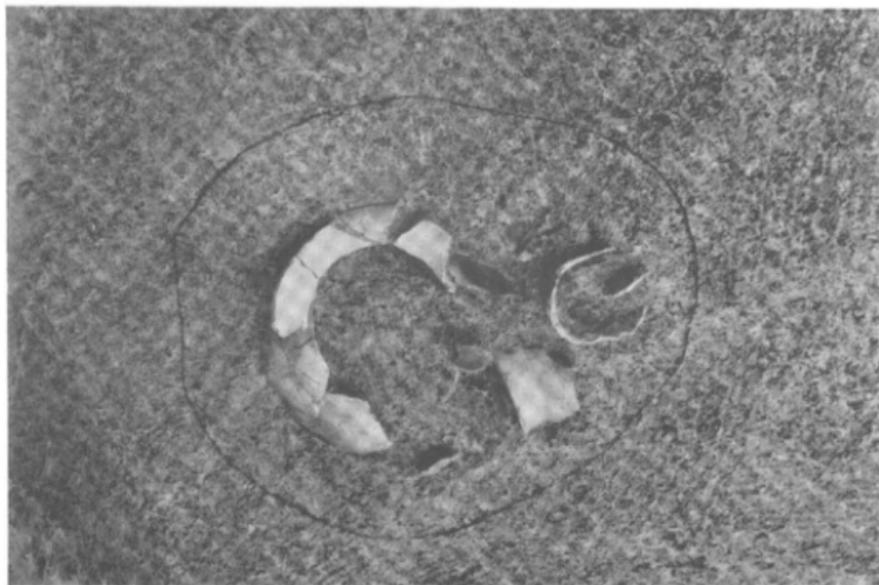
(上) 兼田B地区3のC区溝断面
(下) 兼田B地区2のE区溝断面



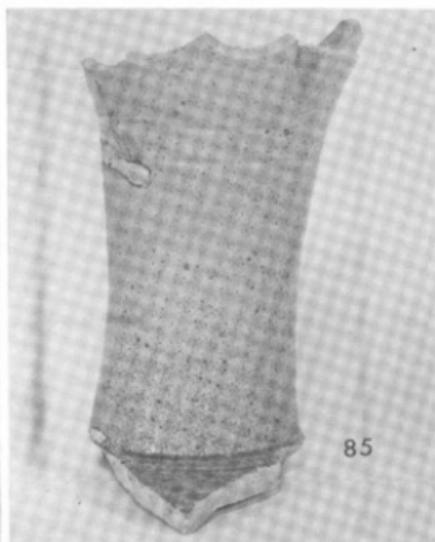
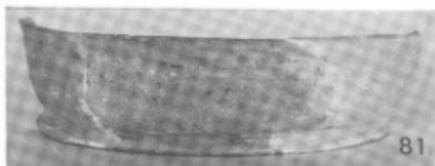
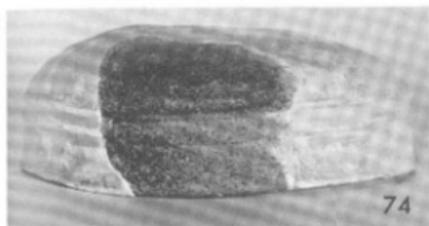
(上) 兼田B地区4のC、D区溝
(下) 兼田B地区3のE区溝断面



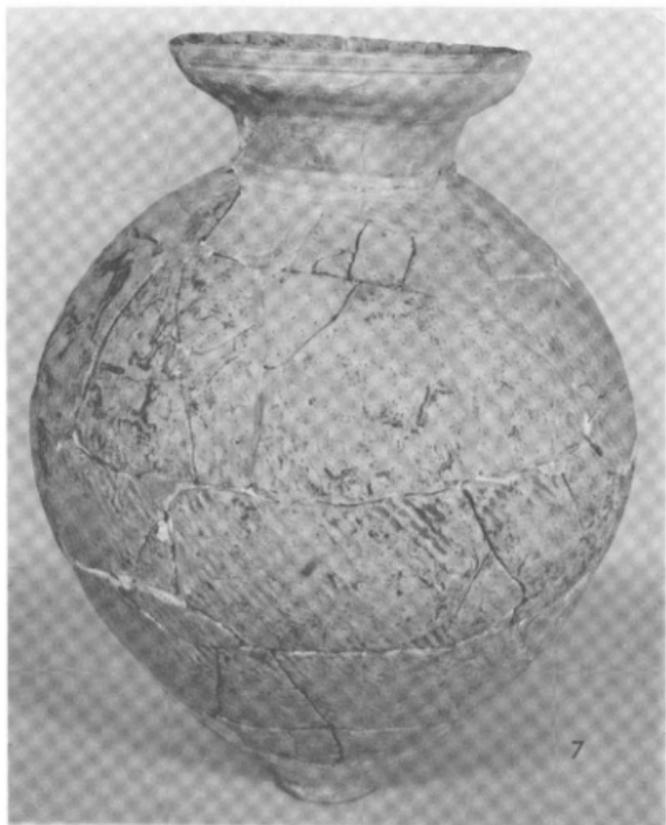
(上) 兼田B地区4のF溝断面 (下) 同2のE溝断面



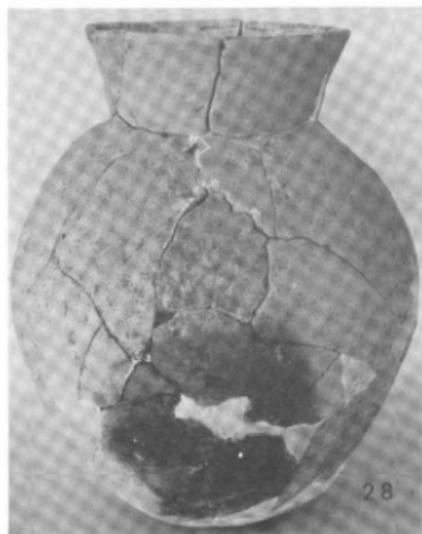
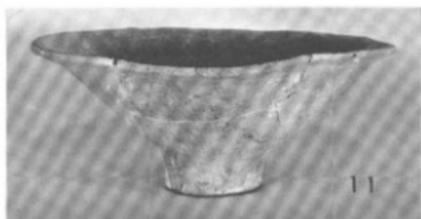
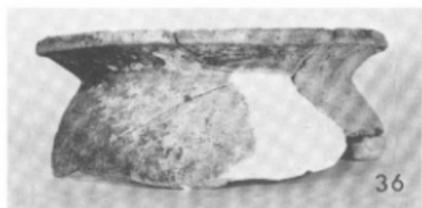
(上・下) 兼田B地区3のD遺構



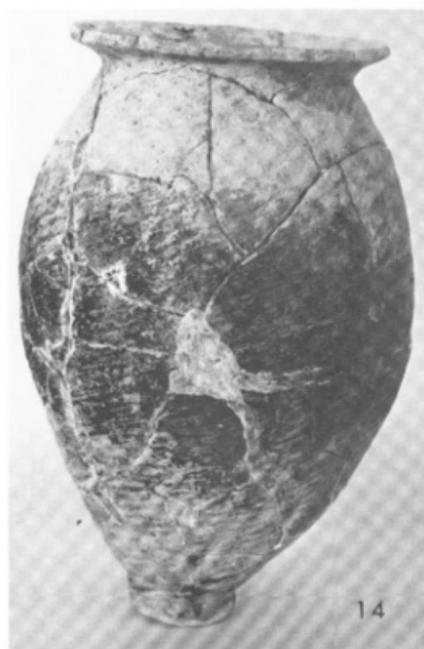
兼田 A 地区出土 18
兼田 B 地区出土 74、81、85、86



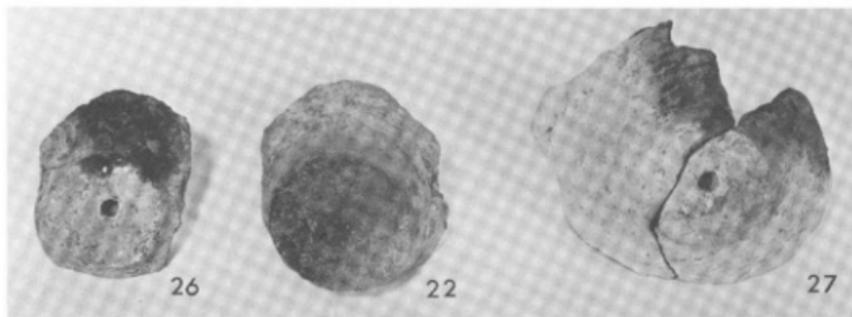
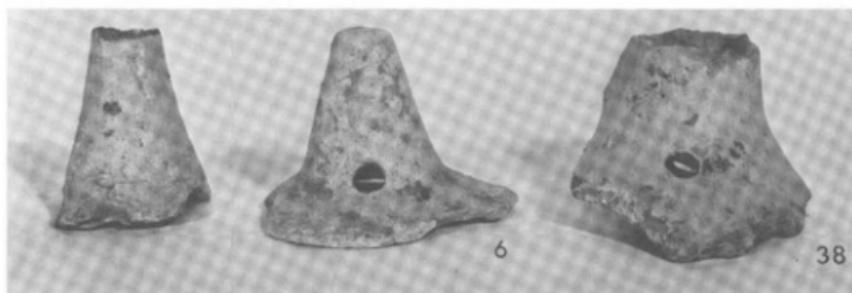
兼田B地区出土遺物



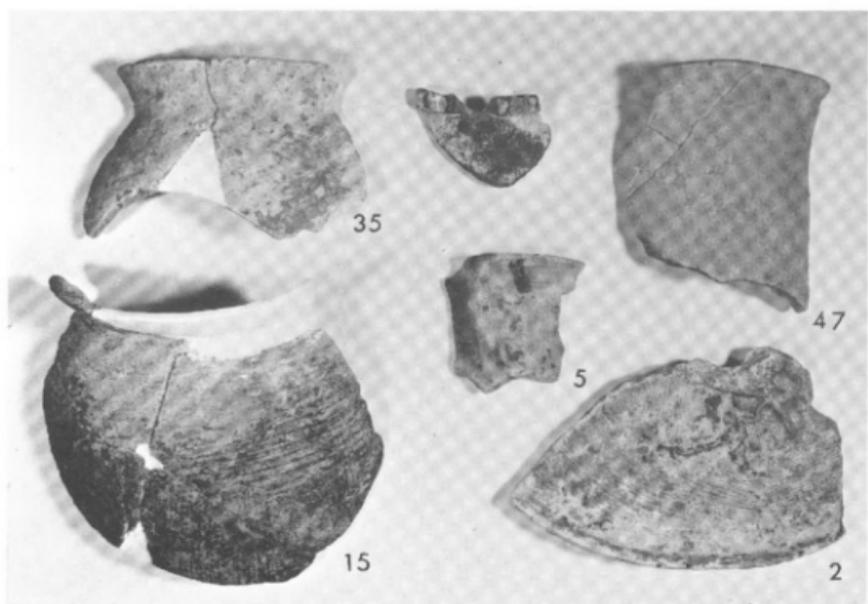
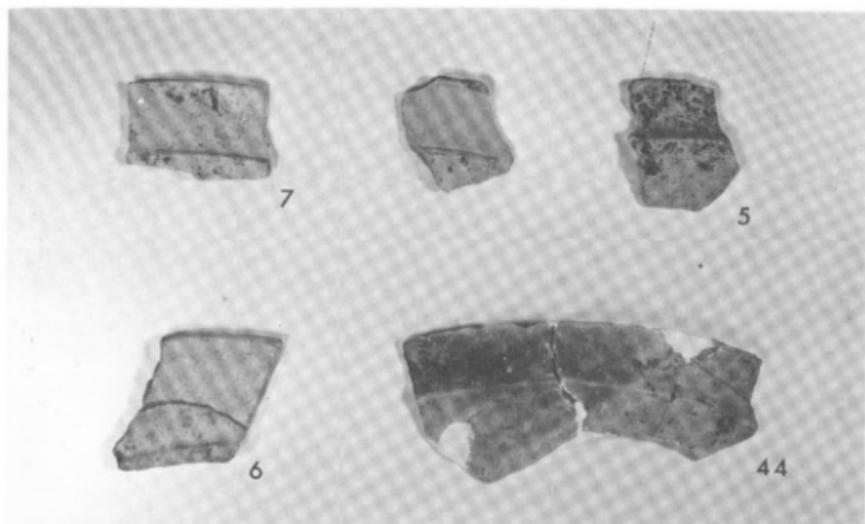
兼田B地区出土遺物



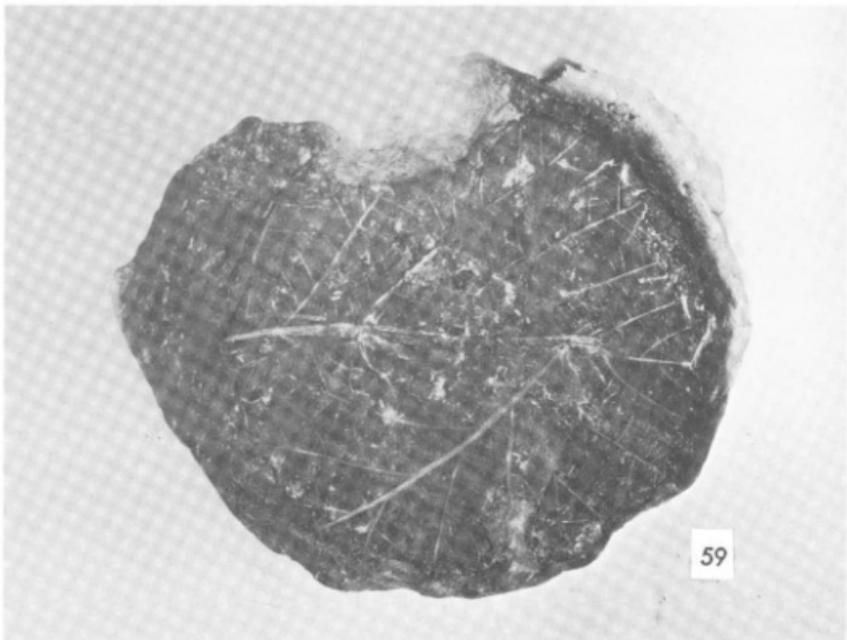
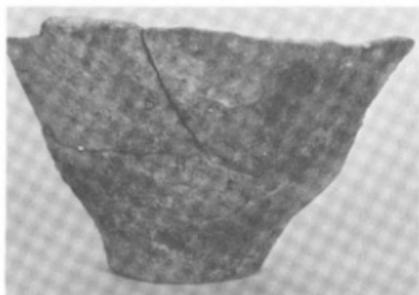
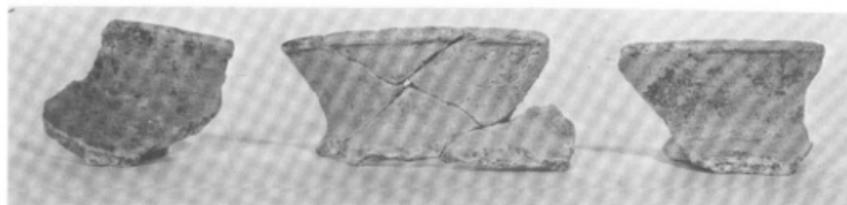
兼田B地区出土遺物



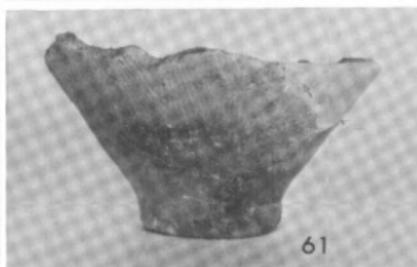
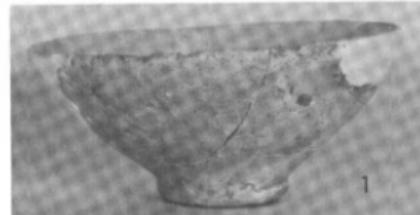
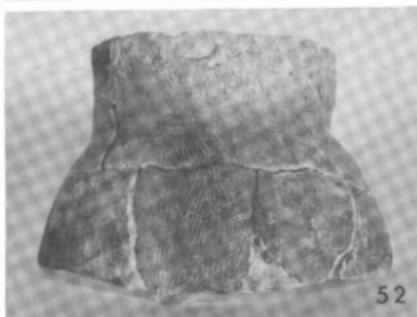
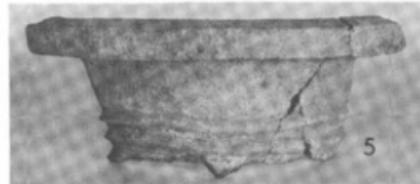
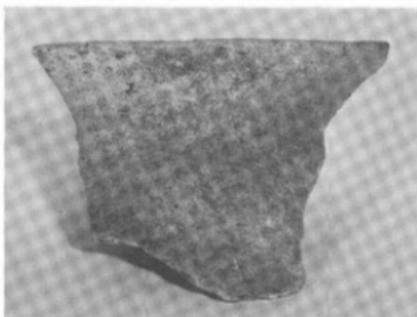
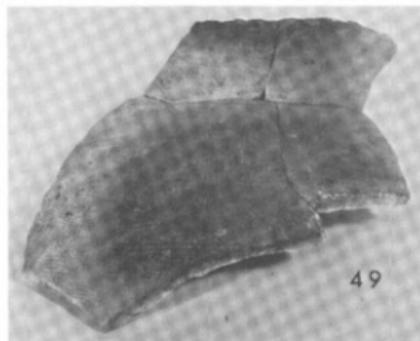
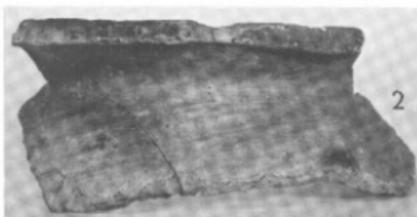
兼田B地区出土遺物



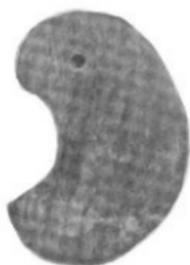
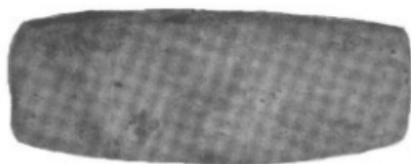
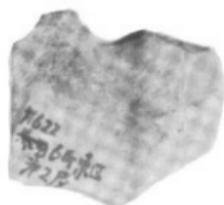
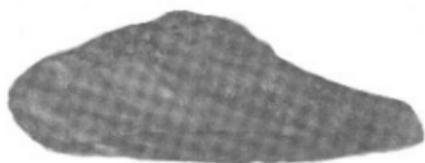
(上) 兼田B地区出土遺物
(下) 兼田A、B地区出土遺物



兼田B地区出土遺物



兼田B地区出土遺物



兼田B地区出土遺物



兼田B地区出土瓦

ま と め

以上、兼田遺跡の発掘調査の結果を報告してきたが、今回の調査で兼田遺跡は、明らかに市川より東に入り込んだ小さな支谷の、丘陵南斜面の山裾部に営まれた遺跡であることが判明した。市川下流流域には、兼田遺跡の他、弥生時代から古墳時代の遺跡が、現在までに多数確認されている。

この遺跡は、弥生時代の中期から古墳時代にあたるもので、市川の氾濫が落ち着いた後にこの地域で人々が初めて生活し始めたのである。

その遺構からは、弥生時代の溝状遺構及び土壇、古墳時代の溝状及び土壇墓、土壇が検出された。

しかし、調査範囲が極く限られた道路建設工事内についてのみであった為、遺跡の中心にあたる生活址の追求が出来なかった事は、まことに不十分な調査結果と言わざるを得ない。

遺跡の中心は、調査範囲より北側から丘陵裾にかけて存在している事が考えられる。

そして、今回の調査で弥生時代の兼田遺跡が明らかに示している様に、弥生時代に育まれたこの地域及び周辺の人々の生活力が、兼田大塚前方後円墳を初め、周辺の古墳の築造の基盤となったのであった。

兵庫県文化財調査報告書第8冊

兼田遺跡

昭和48年3月

編集 兵庫県教育委員会
発行 兵庫県教育委員会
印刷 梶原出版印刷